

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 物資文化研究の方法をめぐって

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 祖父江, 孝男, 大給, 近達, 中村, 俊亀智, 大塚, 和義 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004585">https://doi.org/10.15021/00004585</a>

## 物質文化研究の方法をめぐって

祖父江 孝 男\* 大 給 近 達\*\*  
 中 村 俊 亀 智\*\*\* 大 塚 和 義\*\*\*\*

On the Method of Studying Material Culture

Takao SOFUE, Chikasato OGYU, Takao NAKAMURA  
 and Kazuyoshi OHTSUKA

Study of anthropology in Japan was started in the 1880's by Shogoro Tsuboi, the first professor of anthropology at the University of Tokyo. Professor Tsuboi was interested in archaeology and material culture related to folk-customs in Japan. He also undertook an extensive study of changing patterns of clothing, under the contemporary impact of western culture. Later, together with his successor, Ryuzo Torii, Professor Tsuboi did fieldwork in Northern and other parts of Asia, where their interests embraced a balanced mix of archaeology, ethnography and material culture.

Another important figure in Japanese anthropology is Keizo Shibusawa, a businessman and, soon after the World War II, a Minister of Finance. In 1921 he established a small private museum, the "Attic Museum", in his own home. Mr. Shibusawa and his group collected and studied straw sandals and hats, clothes and various kinds of utensils traditionally used by Japanese peasants. During the 1920's, this group greatly accelerated the study of material culture, and their method gradually became the basic orientation for the field. It should be noted, however, that their interest was focused only on the geographical distribution of each item, and did not extend to the holistic study of the cultural context. As a result, the study of material culture was somewhat isolated from the mainstream of anthropology which had focused on social and kinship organization and ethnohistory among other things.

---

\* 国立民族学博物館第1研究部

\*\* 国立民族学博物館第4研究部

\*\*\* 国立民族学博物館第4研究部

\*\*\*\* 国立民族学博物館第1研究部

This situation exists even today, and most anthropologists in Japan are little inclined to study material culture.

Consequently, the authors emphasize that material culture should be studied from the “functionalistic” perspective, within a holistic framework. Hence the structural analysis of the relationship between man and material culture should be a basic subject, and the influence of material culture on man should also be carefully studied as an important topic in this changing society. In Japan, for example, the disappearance of the *irori*, or traditional hearth on the floor of rural houses, resulted in the destruction of the strictly institutionalized seating arrangements around the hearth, thereby accelerating the change of interpersonal relationships within the family.

Among other aspects emphasized by the authors are the importance of understanding the “folk system”, in addition to “analytical system” of technology, for example, the need for census study of a large sample of a single artifact in order to trace individual variations within a community; and the urgent need to include automobiles, refrigerators, and other modern devices in the analysis and understanding of the present-day folk-life both in city and village.

The discussion is elaborated with examples drawn from three pieces of research that the authors recently undertook: Ohtsuka’s study of fishing communities in Hokkaido, which emphasizes the existence of individual variations of fishing implements within a community and the relationship with each fisherman’s skill and habit; Nakamura’s study of the classification and distribution of hoes among agricultural villages in flatland areas; and Ogyu’s field survey of recent changes in the material culture of Akiyama, long famous as one of the most isolated mountain village regions in central Japan, but which, since about 1970, has been rapidly changing under the influence of tourism.

- |                         |                        |
|-------------------------|------------------------|
| I. はじめに                 | V. 具体的な研究事例をめぐって(その2)  |
| II. 物質文化とはなにか? : 規定のしかた | 生活用具の分布: 平野村の場合        |
| III. わが国における物質文化の研究     | VI. 具体的な研究事例をめぐって(その3) |
| IV. 具体的な研究事例をめぐって(その1)  | 物質文化の変遷過程: 山村の場合       |
| 磯漁具に投影された集団と個人          |                        |

## I. はじめに

昭和50年度から昭和52年度にいたる3年間、私ども国立民族学博物館においては文部省科学研究費（一般研究A）の補助を受け、「日本の村落社会における物質文化の地域的比較研究」と題する共同研究を実施した。この研究は館長・梅棹忠夫を代表者とし、研究部員25名が参加して全国各地の村落における物質文化の調査を手分けして行ったものであるが、この共同研究の大きな目標のひとつは物質文化研究の基本的な方法論について検討し、新たな理論的視野を開発しようとすることにあった。この共同研究の計画担当者であった祖父江および、物質文化を今まで主に研究してきた者としてこの共同研究の主要部分を担当した大給、中村、大塚の計4名はこの目的のため、本研究の最終期にあたって、とりあえず本研究に参加した体験をもとにして集中的な討論を2日間にわたって行った。本稿はその結果を祖父江が中心となってまとめたものである。

本稿において、Ⅱの「物質文化とはなにか？」およびⅢの「わが国における物質文化の研究」は中村がまず問題を提起し、これを中心にして全員で討論を行った。この際、他の3名からさまざまな資料も合わせてつけ加えられている。Ⅳの「具体的な研究例をめぐって（その1）」は大塚が、Ⅴの「同（その2）」は中村が、Ⅵの「同（その3）」は大給が、それぞれ自分の行った調査資料をもとに問題を提起し、Ⅱ、Ⅲと同様の方法で討論を進めたものである。本稿においては、全員の意見を出来得る限り包括してまとめてあるが、意見の一致が得られなかった点、乃至は4名の意見に微妙なニュアンスの差が生じた点については、脚註においてこれを示すこととした。

なお大塚、中村、大給による調査の結果はそれぞれの報告書において近く詳細に発表される予定であるが、本稿においてはとりあえず各自のとった方法論について論述を試みたものであり、そのために必要な範囲に限って具体的資料を提示することとした。なおこの共同研究に参加した他のメンバーによる調査の結果についても、各自のまとめた論文によって順次、発表の予定である。

本文中にも述べられてある如く、従来の物質文化の研究は、いわばモノそのものの研究の範囲をこえない場合が多かった。これに対して私どもの共同研究は、文化人類学・社会人類学の角度から分析を加えようというものであり、そうした方向への具体的な方法のいくつかを試論的に提示しようという私どもの意図するところを汲みとって頂ければ幸いである。

## Ⅱ. 物質文化とはなにか? : 規定の仕方

物質文化という言葉はともすると、きわめて安易につかわれがちであるため、ここでまず物質文化ということばの定義を明確にしておかなければならない。これについてもいくつかの立場が存在するが、ここではとりあえず「人類が生きていくための物的手段の全体」あるいは更に拡大して「人類が生きていくための物的手段をめぐる文化要素の全体」と定義しておくことにしよう。しかしこのような定義を用いれば、物質文化のなかにはたとえば、栽培植物も含めることができるし、またドイツ流の考え方では経済組織や経済行為、特に衣食住を供給する経済行為も物質文化に入ってくる。更には交易といった現象も広義の経済行為なので、これも物質文化に入ることとなる。こうした広いみかたに対し、もっと狭いみかたでは、物的手段そのもののみを物質文化と考えるのである。

このように、「物質文化」には広狭のみかたがあるが、このいずれをとるかは、物質文化という概念を使ってどのような分析をしていくかということによって決まってくると思われる。しかしわれわれの場合においては、とりあえず狭い方の意味で問題をとりあげていくことにしたい。次にこうした立場で物質文化を分析するにあたり、次の3つの点を取りあげて考えることが必要と思われる。

- 〔1〕 物質文化を作りだす意味、アイデア
- 〔2〕 物質文化を作りだす行為そのもの
- 〔3〕 作り出されたもの（上掲〔2〕のeffect たる施設、家屋、道具。従来、考古学で扱ってきた遺物、遺構、遺跡をも含む）

物質文化の研究は人類学のみではなく民俗学、人文地理学などの隣接諸部門、そして特に考古学においても行われているわけであるが、考古学においてはもっぱら、上のなかの〔3〕の遺物、遺構、遺跡を中心に調査を行うことになる。

物質文化研究にあたって最も根本的な問題のひとつは、物質文化という領域のみを独立させてこれを研究することが可能であるか否かの問題、換言すれば物質文化だけを文化全体のなかから切りとって考えることができるか否かの点である。というのは現在までのところ、物質文化のひとつひとつ、または、あるひと組の物質文化だけを独立してとりあげて議論が進められる場合（製作工程・製作技法の研究、比較形態論的アプローチ、系統・変遷論的アプローチ）がないとは言えなかったからである。そしてまた物質文化というものをひとつの概念として、完全にそれのみで自立したものとして設定して分析が行われ得るという立場がとられる場合もすくなくないからである。

文化人類学では、これまで特に物質文化を文化の在り方を示すひとつの指標としてとりあげている例が多くみられる。例えば農耕民と牧畜民の比較をするにあたり、両者の生業の相違のもとらす差異を最も適格に把握するための方法として、それぞれの所有する物質文化を互いに比べることがよく行われているが、これなどは物質文化をひとつの指標として、ある文化の特性なりパターンなりを抽出することに他ならないのであって、このことは、物質文化が文化全体のなかで甚だ重要な意味をもっているということを前提としているといつてよい。やや異なった例をあげるならば、よく知られたものとしては日本の背負いバシゴでツメのあるものとなないもの（有爪型と無爪型）との分布の対比の問題がある。ツメのあるものは九州から瀬戸内海あたりにかけて濃厚に分布し、ツメのない型は全国的に、ことに東日本に分布している。こうした二つの型の背負いバシゴの分布の差異はそれのみにとどまらず、分布の差異の背後には実はさまざまな文化の相違が複雑に存在していたことが考えられるのである。この問題の解釈は充分解決していないが、これに関しては、ただ単に、全国的にツメのない型がつかわれていたところへ朝鮮半島からツメのある型が伝播したと考える以外にも、まだいろいろの説明をすることができそうである。以上の例に示される如く文化の相違点や共通性を示すひとつの指標として物質文化を使うことはたしかに可能である。従来の研究の殆どは物質文化のもつそうした性質にもとづいてなされたものだと行ってよい。

だが次に物質文化を研究する際、実際にはどの点まで掘り下げていくべきなのか？従来の研究においては、その焦点はもっぱら、ひとつひとつの物質文化の「形態」(form)におかれてきた。しかし実をいうところには大きな問題がある。異なった地域・民族のもつ物質文化の form (例えば道具の形態)<sup>1)</sup>はまさに偶然の結果として類似ないし同一のものとなる場合もあり得るからである。したがって前述の如く物質文化を比較の指標として使う場合、特に物質文化を指標として文化伝播のあとを探り、あるいは同一文化のひろがり(文化領域・文化圏)を問題にする場合は、このような偶然による類似・一致を回避するため、先にあげた〔2〕の「作りだす行為そのもの」(技術)および〔1〕の「アイデア」そして技術体系全体までさかのぼり、〔3〕から〔1〕まではひとつづきのものだと考えることがなによりも必要であろう。そうすることにより、たとえば形は一致していたとしても、実は〔2〕なり〔1〕な

1) 考古学者の間では form (形態), type (型式), style (様式) という3つの概念を厳密に区分して使用している。form は例えば個々の土器の形状であり, type は例えば土器の文様, 器形などによって「加曾利 E 式」などという分類概念であり, style はその土器に象徴された生活様式の全体をさす。

りが違う場合を見出すことができるし、さらに形と作り方は同じであっても、文化のなかにおいてそのものの持つ意味が違う（すなわち〔2〕は同じでも〔1〕が異なる）場合のあることを発見することができる。このようにして文化のひろがりそれ自体をより厳密な形で検討することができる。この場合、〔1〕にまずさかのぼって考えるということは、文化におけるパターン、行動の型を問題にするとということに他ならないし、更にいえば住民のパーソナリティの型にまで関連してくるということができるのである、

では物質文化は、これまで如何なる学問の素材として使われてきたのであろうか？ すこし考えてみればすぐわかるように、物質文化は文化人類学（民族学）、民俗学のみならず、歴史学、人文地理学などの素材としても使い得る。生活学や生活史、美術史・工芸論などの素材としても役立つ。物質文化はこのように極めて多方面の学問領域において研究され得るものであるが、それならば特に文化人類学において物質文化を研究する特別の意義はどのような点にあるのであろうか？

もちろん文化人類学における物質文化のとりあげかたと、他の諸分野における物質文化のとりあげかたの間にならぬ相違点もみとめないという立場もあり得るが、しかし文化人類学における物質文化研究の独特の役割、立場を考えるならば、社会組織との関連性の重視とか、文化全体のなかにおける物質文化の位置づけとかいった行き方をまず考えることができるのではあるまいか。こうした点について更に考えを進める前に、わが国における物質文化の研究史を概観し、その特色を考察してみることにしよう。

### Ⅲ．わが国における物質文化の研究

#### 1. わが国における物質文化の研究史

わが国における物質文化の研究史を考えると、他の国の場合とは相当に異なった事情の存在することが指摘される。すなわち日本においては過去において、「民具」というものが民族学の物質文化研究の前面に登場した事実である。したがって、民具の研究を軸にしてわが国における物質文化研究の歴史を考えてみる必要がある。この立場に立つとき、日本における物質文化の研究をアチック・ミュージアムの設立などを基準としていくつかの時期に分けることができる<sup>2)</sup>。

2) 民具の研究史については〔宮本馨太郎 1963, 1973〕。

## 1) アチック・ミュージアム以前

今日、世間一般の間でもポピュラーな存在となっているこの民具ということばは日本常民文化研究所（旧称アチック・ミュージアム）の創設者・渋沢敬三が1933年（昭和8年）ころに提唱したことばであり、彼自身の定義によれば、「われわれの同胞が日常生活の必要から技術的に作りだした身辺卑近の道具——庶民の生活用具全般の呼称」[アチック・ミュージアム 1936: 1]ということになるが、それは精神文化（民俗）に対する物質文化（民具）として、民具研究が民俗学における二つの部門のひとつを構成するものという考え方から出発していたようで、いわば極めて広い概念であったと思われる。現在からみれば、それは近代社会における機械文明の影響を受けない民俗的伝統的な生活用具をさすということになる。

この分野において科学的研究が始められたのは明治の初期、坪井正五郎によるものであった。1884年（明治17年）、当時東京帝国大学理科大学生物学科の学生であった彼は同志とともに人類学会を創設し、当初は僅か20余名であった会員は数年後には200名を超えているが、1886年（明治19年）に第1号が刊行された機関誌『人類学雑誌』の内容をみれば、創刊当初、最もウェイトのおかれていたのは土器、土偶など考古学の領域にわたるものであり、これにまぎって日本における「婚礼の習俗」や年中行事、小正月行事などについてもまず関心が向けられている。しかしやがて坪井らが最も興味を以て追求したのは「削り掛け」であって、その種類と分布についての議論が続けられ [坪井 1887a, 1887d, 1887e; 山中 1887; 和田 1887; 大矢 1888], その他、当時の各家の門口における呪符や呪具、そしてまたおハグロなどについてもとりあげられている。

このように物質文化の科学的研究は坪井によって開始されたのであるが、ここで特筆すべきことは彼が当時、日本人の髪型、衣服、履物の文明開化について強い関心に向け、後に昭和時代になって今和次郎が「考現学」の名のもとに行っている街頭調査を「風俗測定」と命名してすでに1887年（明治20年）に開始し、東京その他において数百名ずつを調査していることである [坪井 1887b, 1887c, 1887f, 1888, 1889a, 1889b]。但しこの風俗測定も1889年（明治22年）、坪井がヨーロッパへ出発すると共にそのまま終ることとなった。

やがて坪井が帰国してからあと研究の関心は日本からむしろ周辺諸民族へとひろげられていく。こうして坪井からそのすぐあとの鳥居竜蔵へとひきつがれた当時の学風の特徴は、その頃のいわゆる土俗学（当時は ethnography の意味に使われていた）と考古学と、そして物質文化研究とがいわば三位一体の形をとっていた点である。こ



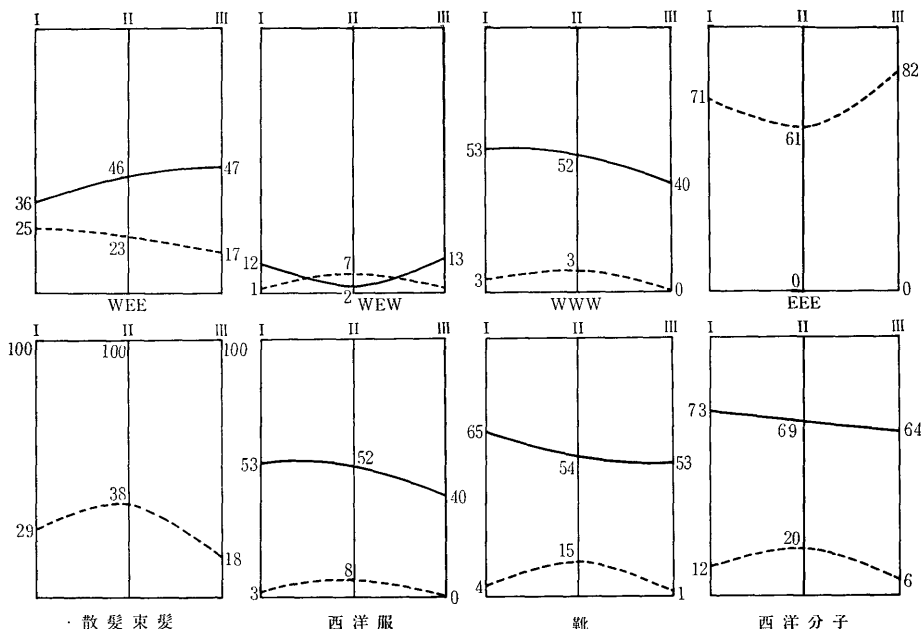


図1 坪井正五郎が明治20年4月、21年4月、22年4月東京の街頭で行なった髪型・服装・履物の3年間の調査結果の比較（調査数はそれぞれ900名、567名、1,108名）。この図で実線は男子、破線は女子を示し数字は%。またWは西洋式、Eは日本式を示し、3つの字は左から順に髪型、服、履物を示す。[坪井 1889b: 281]

うして隣接諸民族の土俗品がつぎつぎに収集され、比較研究がなされていったのであった。

## 2) アチック・ミュージアム期

1921年（大正10年）、渋沢はアチック・ミュージアムを創設し、1926年（大正15年）頃に到って彼をはじめとする何人かのグループが縁起物・玩具たとえば各地のだるま・人形・コマなどについての採集を開始し、これがやがて、民具という概念の発見にまで到達したという<sup>3)</sup>。

この時期の大きな特色は、庶民の生活用具を科学的にとり扱ってみよう、特に自然科学的な方法、いわば当時の自然科学的な「わり切りかた」を用いて民具を研究してみようという点にあった。かくて生物学における昆虫や動物の分布研究の場合と全く同じような方式で、たとえばアシナカ、背負いハシゴ、ワカンジキ、着物、カサの類

3) 渋沢は正金銀行時代、ヨーロッパへ転任した当時、デンマーク・スカンセンの博物館でヨーロッパにおける folklore の研究に接して強烈な刺激を受け、帰国後、それまでの単なる好楽的研究とは一線を画した自然科学的な研究方法を民具にもとり入れることを思い立ったという（中村への渋沢の談話による）。

などがとりあげられ、ひとつひとつの文化要素の分布を丹念に追い、それがどう使われているか、どういう技術で作り出されたかなどの分析のなかから、日本の物質文化の特色をみちびき出していきたいと考えたのであった。こういった方式は博物館としてのアチック・ミュージアムの標本整理という仕事のなかから、おのずから生まれ出したものであった。そこにはスカンセンその他の外国の博物館や民俗学からの影響も、もちろん見落せないが、むしろ数おおくの民具を集め整理した経験の蓄積にたつた、自然発生的な性格が強く存在していたと考えられる。

なおこの時期にはもうひとつ柳宗悦によって提唱された「民芸運動」がある。白樺派の創始者の1人であった柳は民衆の日常生活のなかに生きている美の世界に工芸そのものの真の姿のあることを強く提唱したのであった。

なお今和次郎らによって1935年（昭和10年）前後から農村生活改善のため、農村の住居と生活用具についての調査が行われ、その斬新な方法論が多くの人たちから注目されることになった。今和次郎はそれ以前にも考現学（モデルノロジー）という新しい分野を提唱したがその素材として、生活用具や服飾についての調査結果を大いに活用している [今・吉田 1930, 1931; 今 1971-72]。

### 3) 日本民族学(協)会付属博物館の時期

1934年（昭和9年）の終り、小山栄三、宇野円空、石田幹之助、古野清人らが世話人となって白鳥庫吉を理事長とする日本民族学会が設立された。そしてまもなくアチック・ミュージアム所蔵の民具13,000点が、この学会に寄贈され、1938年（昭和13年）に東京都下の保谷に付属博物館と付属研究所が付設されることとなった。なお1943年（昭和18年）に民族研究所が設立されると民族学会は日本民族学協会と改称し、1960年代のはじめまで続いたのである。

こうした付属博物館の時期を更に戦中期、戦後期の二つに分けるならば、戦中期は民具の研究がそのまま民族学の研究にとり入れられた点に特色があるといえよう。事実、アチック・ミュージアムにおける民具の研究者の多くはこの時期、そのまま民族学(協)会に移って研究をまとめつつあった。ただここで問題にしておいてよいのは、日本における民具の研究法はいわば2)のアチック・ミュージアム期に確立していわば固定してしまっていたことである。文化人類学の歴史からいえば、当時は Malinowski, Margaret Mead, Ruth Benedict などの英米の人類学者の新しい研究方向が次々に出されていた時期であり、それらが日本の学界へは充分紹介されていなかったとはいえ、しかし現在の文化人類学にそのまま通ずる流れはすでに存在していた。しかしこうした文化人類学全体の流れと民具研究の流れとは、全く水とアブラの如き関係にあ

り、民具研究は日本の文化人類学の流れのなかにポツカリ浮かびあがってしまっていた印象をうける。こうした状況は戦後にもそのまま引き継がれているということが言えよう。

それならばこの付属博物館期の研究全体についてはどう評価され得るだろうか？これに関しては、アチック・ミュージアム以来の民具研究のような研究方法ではめばしい結果は得られないのではないかという甚だ冷たい評価のあることをまず指摘しておかねばならない。アシナカの研究にしても、その「予報」は出されているが、しかし本当の報告は今日に到るまでついに出不されている。そうしたところから、アチックの研究は「破産した」という話も掛けにされているくらいであるが、しかしアチックの研究が行われたその当時は、アシナカならアシナカにしても、どういう型が設定でき、それぞれの型が日本列島に如何なる拡がりをもっていたかは全くわかっていない時期であったから、それぞれの調査の示す事実がいかなる意味をもつか迄は到底手がまわり得ないというのが実情であったと考えられる。現在の時点からみれば、そうした点を充分考慮すべきだと思われる。つまり当時の調査なり、研究なりの結果だけをみてアチック・ミュージアムの研究法を全体的に否定しようとするのは大きな誤りであり、むしろアチックの方法を現在ならば更にいっそう深めてゆくことを考えるべきではなからうか。すでに先に強調したような、アチックの民具研究の遺産を受けついで「物質文化を中心とした文化の全体的把握」といった方向へもっていくことは十分に可能だと考えられるのである。但しここで書きそえておくべきは、台湾高砂族やミクロネシアその他、周辺諸民族の現地調査を行っていた人類学者の多くは、必然的にその現地における物質文化をもまた収集し、その際はおのずから全体的な文化のなかにおいてその物質文化を把握する方向にあったという事実であろう。

だがやがて敗戦と共に戦後の数年間は日本の人類学は完全に虚脱状況におち入ってしまう。調査・研究の殆どが完全にストップしてしまったことに加えて、当時の日本の大学では文化人類学関係の講義は殆ど皆無に等しかった。僅かに早稲田大学とそして東京大学においてそれぞれ1つずつ講義があったのみであるが、後者の場合、理学部人類学教室において杉浦健一が講師として土俗学を講義していた<sup>4)</sup>。

ここで土俗学とは、先にも述べた通り *ethnography* を意味する明治以来の用語であるが、敗戦直後の人類学教室においては当時名誉教授であった長谷部言人のもつ独特の人類学観がこめられ、ドイツ語の *Ergologie* の訳として考えられていた。*Ergologie* とはギリシア語の *ergos* (はたらき、仕事の意) をもとにして長谷部の作った用語で

4) 杉浦健一については[祖父江 1976a]を参照のこと。

あり、いわば「人間のはたらきの研究」というくらいの意味である。1960年代後半期に自然人類学の人びとが集まって結成したエルゴロジーの研究会においては、このことばを「勤態学」と訳しているが、この場合はむしろ人間工学に近い意味をもっている。これに対して当時の人類学教室における土俗学=Ergologie は、人間の作りだしたものの、すなわち「物質文化」に関する研究という意味を強く打ち出していた。

長谷部独自の構想によれば、「人類学とは人間の理学である」と規定されていた。「理学」とは現在のことばでいえば要するに自然科学の意である。このなかに含まれるのが、まず「体質人類学」(今でいえば自然人類学)と並んで先史学と土俗学なのであったが、先史学なる用語も自然科学的な技術を使って研究するという独特のニュアンスがあった。土俗学のほうにも全く同じような意味あいがこめられていて、伝統的な民族学とは違うのだという点を強調するトーンが強かった。つまり体質人類学が人間の身体を研究するのに対して、土俗学のほうはその人間が働いて作りだしたものを研究する、ここにおいて人間の身体とその産物との研究が直結するのであるというように考えられていた。長谷部の場合、多くの理科系出身者に往々にしてみられる如く、自然科学の優位を常に意識して強調しており、その結果として、物質文化の研究を文化人類学のいわば中心的存在として非常に大きく強調することとなったのであった(逆にいえば、社会組織や宗教などといった主題は文科系のやるべきもので非科学的な研究に属するというのが長谷部のみかたであり、従って理学部に属する人類学教室のなかでは扱われにくいという雰囲気があった)。

こうして杉浦の場合、おそらく他に前例のないほどの総括的な物質文化の概論をこの土俗学の講義において行っていたのであり、この点は日本における物質文化研究の歴史を記すにあたっては特に強調しておくべきことのように思われる。なお杉浦がこの際、最も重視していたのはフランスの民族学者 George Montandon の『文化民族学概論』[*Traité d'ethnologie culturelle*, 1934]であったが、しかし杉浦自身、ミクロネシアの漁具やココヤシ葉製編籠についてすぐれた研究を出しており [杉浦 1942a, 1942b], 日本における物質文化研究史のなかで杉浦の果たした役割は決して小さくなかったと言える<sup>5)</sup>。

だが杉浦も戦後の一時期が過ぎて1950年(昭和25年)となり、世のなかがいよいよ落ち着き、国内の実地調査が可能になってくると物質文化研究からしだいに離れ、社会構造、特に親族構造へと関心を向けていった。1950年代、殊にそのなかばから後半に

5) なおこの杉浦の指導のもとに祖父江はミクロネシアにおけるココヤシ葉製編籠の研究を学士論文としてまとめた [祖父江 1966]。後に行ったエジコの研究 [祖父江・須江(原)・村上 1957] も杉浦の影響によるところが大きい。

かけての時期は日本の文化人類学の最初の興隆期であった。この時期に文化人類学、社会人類学の新制大学院が日本ではじめて東京都立大学、東京大学に創設され、ここで多くの若い学徒が学ぶこととなったのであるが、彼等は杉浦その他の少壮人類学者の指導を受けながら、特に社会構造論、親族構造論へと関心を向けていった。ちょうどこのころ、G. P. Murdock の名著 *Social Structure* (1949) や C. Lévi-Strauss の *Les structures élémentaires de la parenté* (1949) が日本に入り、特に若い世代へ大きな影響を及ぼすようになった。かくて日本の文化人類学における主流はしだいに社会人類学となって行き、加えて他方では日本民族の系統論も多くの関心をよぶ主題となったのである<sup>6)</sup>。

ところがこうした戦後の日本の文化人類学のさなかにおいて、民具研究はどのような位置を占めるに到ったかといえ、さきにも述べた戦前の状況と同じで、まさに水とアブラの関係にあり、文字通り浮かびあがっているというのが実情であった。日本の戦後の人類学の流れを民具研究のほうで吸収して、日本民族文化論について新しい発言をするなどということは全くなかったのである。こうしたことの原因としてはいろいろ考えられるが、文化人類学の分野の人びと、特に戦後世代の学徒たちが、物質文化の研究は民具研究者のところですでに出来上ってしまっている、あるいは考古学の分野でなされてしまっていて、自分たちが手を出してもあまり開拓の余地がないという気持ちをもっていたともいえるし、もうひとつ物質文化の研究をやるには技術文化の理解が不可欠の要因になる。その技術文化の分析をどう進めていくかについてのスタンダードの手法が文化人類学のなかでは確立しておらず、そのため甚だしく取りつきにくい感じを与えることになったといえることができる。他方、民具の研究者の側に言わせれば、社会構造や日本文化論などを扱う人たちは仮説のみ扱っていて実証の裏づけがないではないかというみかたが存在していたように思われる。

但しこうした傾向は単に日本だけの特徴ではないのかもしれない。ヨーロッパの人類学においては今日なお物質文化研究が相当さかんに続けられていると言えるのであるが、アメリカの場合は1920年代から30年代にかけて重要な役割を占めていた物質文化研究、特に Wissler や Dixon らをはじめとする当時のアメリカ・インディアンの研究において最も重要な位置を占めていた物質文化研究は、1940年代から50年代にかけて社会組織、親族組織への関心にとってかわったのである。かつてはアメリカのどこの大学の人類学の講義のなかでも非常に重要なウェイトを占めていた物質文化論の

6) 岡 正雄、江上波夫、八幡一郎、石田英一郎の4名によってなされた日本民族・文化の起源についての座談会〔岡・江上・八幡・石田 1958〕は各方面に大きな影響を与え、多くの研究がこれに刺戟されて出発することとなった。

講義が、40年代から50年代にかけて急減し始め、50年代のなかばには全米中で僅かハーヴァード大学ひとつにあるだけとなっていた。そして人類学全体の流れのなかで物質文化研究の占める位置も日本の場合について述べたのとほぼ同じであったと言える。

#### 4) 現 在

1950年（昭和25年）に国の文化財保護法が改正されて文化財のなかに民俗文化財（当時は「民俗資料」という名称）というものがおかれることになり、美術工芸品とともに文化財として登場するに到った。各県には文化財保護課があり、民具が文化財としての扱いを受けることになったのであるが、実際のところこうしたものと文化人類学は全く接触をもつことはなかった。また高度成長の結果、ダムや道路の建設という目的のために古い民家の取りこわしが行われ、そこで各地に民俗博物館設立の気運がいっせいに強まることとなった。実のところ民俗学においては従来、民具を積極的にとりあげる方向にはなかったのであるが、しだいに民具を取り扱う方向が登場してきた。従って民具ないし物質文化の研究は民俗学、そして考古学の人たちの間でさかんに行われることになってきたのである。そのなかで文化人類学において特に際立った研究の動きはなかったといってよい。

他方、最近の動きとしてむしろ特筆すべきは文化庁による民俗地図の発行であり、そのなかには全国の物質文化の分布についても記されてある。また文化庁は全国の博物館を対象にして資料調査を行っている。

文化人類学と直接関係をもたないかもしれないが、最近の民具研究で注目しなければならないのは、日本常民文化研究所、ないし民具学会の動向である。旧アチック・ミュージアムのメンバーのあいだには、渋沢敬三の古稀を記念して出版された大冊の写真集『日本の民具』（全4巻、慶友社）が公刊された前後から、再び——というのは、それ以前にも絵巻物の研究をめぐる研究会などが行われた——結集しようという気運が生まれ、それは、渋沢がなくなった後、日本常民文化研究所の主要な仕事のひとつとして、民具研究をとりあげるまでに発展した。こうして、アチック・ミュージアムの同人に加えて、あらたに民具の研究を行おうとする若い世代によって、定期刊行物としての『民具論集』や『民具マンスリー』が刊行され、また、宮本常一に指導された武蔵野美大の人たちや大手私鉄の近畿日本鉄道をバックにもつ財団法人日本観光文化研究所、テム研究所の人たちが、緻密なあたらしい方法を持ちいて、着実にキメのこまかい民具研究を展開している。

民具学会は、現在も各地で研究会や講習会をひらき、啓蒙活動にもおおきな成果をあげているが、民具の研究を民族学だけのものから、独立したひとつの学問分野とす

ることをめざし、その結果として、民族学や民俗学の外に引きだしたという役割は重視されてよい。このほか、近畿民具学会が根強い活動をつづけているし、前にも触れた今和次郎の学問的伝統をいっそう発展させようとしている日本生活学会のなかにも民具をとりあげる研究者が参加して研究成果をあげつつあることも見逃せまい。

## 2. 今後の問題点：物質文化の方向はどうあるべきか？

### 1) アチック・ミュージアム調査の欠点

以上、日本の物質文化研究の歴史について概観してみたのであるが、それでは文化人類学の分野における物質文化研究は如何にあるべきなのであろうか？ どのような方法を用いることによって、他の分野にはみられない独自性を示すことができるのであろうか？

こうした問題を考えるためのいとぐちとして、今まで度々あげてきたアチック・ミュージアム流の研究法についてもう少し掘り下げて考えてみることにしよう。背負いバシゴやアシナカについての調査がなぜ、見方によっては顕著な結果を生みださなかったかといえば、その方法の中心は物質文化を構成するひとつひとつの要素についてその分布をたしかめ、その要素についての呼称や使用法、つまり要素についての伝承を全国共通の項目別に調査していくというやりかたを採用した点にあった。その目的のためにはアチック・ミュージアム民具調査項目というものが作られていて、7つの大きな項目（民具の名称、採集地、製作方法、材料、使用法、分布、由来・来歴）についてこまかく調査するよう手引きが出来ている【アチック・ミュージアム 1936】。

こうして集められた結果は学問的には極めて興味あるものと考えられるが、ただ調査の結果をどうまとめるか、そのまとめかたが問題であって、アチックの場合には、アシナカならアシナカについては全国でどんな名称があり、どんな使われ方をしているかなどと作業的には文字通り項目別に分担してまとめていく方法がとられている。つまりAという人は名称について、Bという人は使い方について……などと分業で整理していき、これを最後に出し合ってまとめるのである。このような研究を共同研究によって、分業化して行う方法は、当時としては、たいへん新しくすぐれたものであるが、しかし、一面、これは要するに「型わけ」の仕事であって、その段階において追究を終えてしまっているのではないかと思われる点に大きな難点がある。

すでに前にも強調した如く、例えばある地域のある型のアシナカについて、名称・形態・使用法・材料・製作法、そして更にはそのアシナカのその文化のなかに占める位置、換言すれば、それを使う人たちがどんな気持でそれを使っているかといった点

までを含めて、全体をまさに integrate した形で把握しないと不十分なのであるが、アチック式のやりかたではいわばそれらの各要素をバラバラに扱い、バラバラのまま要素ごとに型わけをし、それをまとめにしまった点、いわば素材のまま提供した形に終わっているのがであった。更にいえば中断された形のまま素材を提供し、更に深い分析はそれを使う研究者にまかせるという形であった。

しかし民具を研究した人たちのすべてがこうしたアチック流の行きかたのみだったかといえば、そうではない。アチックとは全く別個に、まさに上記の如き全体を integrate した形で、あるいは表現を変えればはなはだ機能主義的な形で行った人として、向山雅重の存在を忘れることはできない。彼のワラジの研究 [向山 1943, 1968a, 1968b] は、長野県伊那地方というごく限られた地域においてワラジが型によってさまざまに呼びわけがなされていることに注目し、なぜそうしたことがおこったかを明らかにするため、ワラジのひとつひとつについて各々の型のもつ用途や履き方を究明している。かくて同じひとつの土地でも何種類かのワラジがあり、各々、使用法も異なっているため、ワラジを使う人の感情も異なり、型ごとに違った名称が行われていることを実証的に明らかにしたものであった。

こういう研究はもとなされてよかったものであるのかかわらず、極く最近まで殆どなされていない。但し今まで述べてきた断片主義は単にアチックの物質文化研究だけにみられるものではなく、民俗学においても「海村生活の研究」や「山村生活の研究」に最も顕著にあらわれている如く、すべて細かい項目に分けて項目ごとに「採集」するのが伝統的なやりかたであった。民俗学においては Malinowski 流の機能主義的分析は現在に到るまで殆どつきつめられていないといつてよい<sup>7)</sup>。

## 2) 全体の総合的・構造的把握への方向

こうして考えてきてみると、全体を integrate するという方向こそが文化人類学における今後の物質文化研究の独特の立場として強調することができるようと思われる。なお同じく文化人類学乃至は民族学の分野においても、ドイツ・オーストリアの文化史学派においては文化圏を論じていく上に物質文化を非常に重視しているわけであるが、なお個々の物質文化ひとつひとつのあいだの結合関係がかならずしも実証的ではなく、同一文化のなかにおける文化要素（同一文化における一組の文化要素を複合というが）の横の脈絡については充分触れられていなかった。したがって、しばしばい

7) Malinowski その他の人たちの、いわゆる機能主義的な行き方が研究の最後のゴールだとも、最良の方法だとも言っているのではない。それは、むしろ、ひとつの出発点としての意義をもつのである。



われているように、例えばメラネシアにおける「外婚制母権文化圏」内において男子結社、渦巻文様が存在していることが論ぜられてはいても、その両者の間にいかなる機能的関係が存在しているかについては全く論ぜられることがないままに終わっていた。こうした点についての批判がひとつの出発点となって機能主義的な方向が生まれたのであって、またその機能主義の基本的な考え方に対して批判がさまざまに存在しているわけではあるが、しかし物質文化の研究にあたって機能主義的な考え方を無視してしまうことは避けるべきであろう。

文化のなかからモノだけが切りはなされ、それだけが独立して研究されがちであった。しかしやはり必要なのはモノと人との関係を perspective にみていく立場であろう。こうした点は、例えば最近の村落における急激な変化のなかで、道具について考える場合などとくに必要となる。同じ道具なり衣服がかつては伝統的な symbolic な意味を持っていたのにもかかわらず、現在はその意味が失われ、従って生活の中に占める役割は完全に変化してしまっている。もしこうした側面に注意せず、単にモノだけを調べて形態や型のみを問題にするとしたら、文化変化の過程で人はモノに対して、如何なる対応のしかたをしたかというような側面は欠落してしまうことになる。

こうした意味において、このような全体的な把握の方向はまた人とモノとの「構造的<sup>8)</sup>」な把握という表現でもあらわすことができる。その場合、物質文化だけをとりあげて「物質文化の構造」といっても、それは要素の集合体であって、研究対象として物質文化だけをとりあげたのでは完結した系とは成立し得ないからである。この点では同じ構造といっても、「社会構造」などの場合は意味がやや異なってくる。社会構造の場合には常に人間をそのなかに含み、ひとつの完結した閉じた系を作ることができるからである。「物質文化の構造」というときには必ず人間とモノとの相互関係の総体が重要だとする考え方である。これに対して、物質文化だけをとりあげ、その全体的な特色を論ずるときにはこれを上と区別して仮に「物質文化の様式」とでもよぶのが適当ではないかと思われる（図2において、物質文化の「構造」は人と物質文化ひとつひとつとを結ぶラインの総体であり、物質文化という平面上に

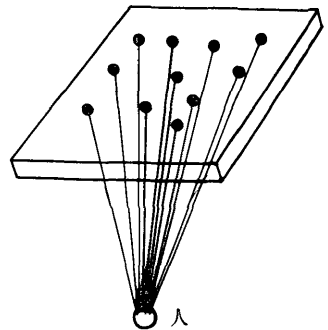


図2 人と物質文化の関係（黒丸は個々の物質文化をあらわす）

8) ここでいう「構造」とは構造主義でいうものとは異なり、「人とモノとのシステム的な関係」をさす。

における黒丸相互間の全体像が「様式」である)。そしてこの際、同じく物質文化研究といっても、様式に重点をおく立場と、人との関係に重点をおく立場と、細かいニュアンスの差があり、それによって微妙な方法論の変異が出てくるように思われる<sup>9)</sup>。

### 3) 他に提唱されるべきいくつかの試み

上にあげた如き方向につけ加えて、文化人類学における物質文化研究の今後におけるところみとして提唱しておきたいものを二、三あげるならば次の通りである。

その第一は前にも何度か触れたモノと人との関係を取りあげるにあたって、従来もっぱら重視されてきた人→モノという方向の相互関係だけでなく、その逆のモノ→人の関係をも課題として重視することである。すなわち「人間は機械を使うがまた同時に機械によって使われる」ということをよく言うが、モノによって人間が新しい行動のパターンを植えつけられ、動かされる側面について考えることも重要である。この点は最近の変貌しつつある社会をみるとき、また特に必要のように思われる。例えば民家においてはイロリバタにおける座順が伝統的に極めて重要な意味あいをもち、これが家族制度と関係し合い、「イエ」制度を物的に支える役目も果してきた。ところが最近はどこでもイロリがなくなり、これが伝統的な「イエ」制度を崩壊させる上に甚だ大きな役割を演じている。一般的にいてモノは人の制度的側面をはじめ精神的側面の一部を支える役割を果しているのであるが、こうした部分についての研究が望ましいし、また現在の如き変革期におけるさまざまなモノの変化が与える人への影響は極めて重要な課題と思われる。なお J. A. Price [1973: 216] による次の指摘を紹介しておこう。「物質文化は人間の行動を根本的に規定している。……この点は特に現代の工業化した都市文化の中において著しく、都市においては物質文化の方が精神文化や社会的側面よりも、もっと重要な力を持ち始めている。われわれの衣服、住居、交通機関、通信機関がわれわれの思考様式や対人関係に及ぼす影響は最も大きいのである。例えば機械によって大量に同一規格のものが製造され、同じ値で誰にでも販売されるということは、階層間の物質的な差を抑制しているのである。」

第二に物質文化に対する人の関係をみる場合におけるフォーク・システムの考察と分析である。例えば中村による最近のカゴの研究 [中村 1976, 1977a, 1977b, 1977c] においてみられる特徴は、道具の使い方を面接によってかなり掘り下げてたずねてい

9) この点についてはわれわれ4名の間においてもその意見に微妙なニュアンスの差があり、完全な合意にまでは達していない。大筋のところでは本文中に記した結論に同意しながらも、「様式」の研究からまず出発して、しだいに「人」へと移行することを強調する考え方と、逆に「人」の問題をまずとりあげて、しだいに「モノ」へと移行していく立場との二つが分れたと言っている。

る点である。物質文化の技術の面にしても、研究者の分析システムに立った技術、いわば研究者の側からみた技術についての研究は今までも普通にあったのであるが、それでは住民自身はその技術についてどう考えているのか、彼等自身はその技術をどう分類しているのか……などといった側面についての研究は意外になされていなかった。この問題は文化人類学一般の研究方法の問題ともからみ合ってくるのであるが、J. Beattie がはっきり分けて扱っているようにいわゆる「分析システム」での研究と「フォーク・システム」での研究との二つが必要であろう [BEATTIE 1964: 49-64]、(なお P. Bohannan も folk system と analytical system という二つをはっきり分けることを強調している [BOHANNAN 1963: 11, 14])。物質文化の研究において今後 folk system に立って集めた資料を、analytical system に立てもう一度分析し直してみることが必要と思われる。従来、民俗学においてなされている民具の研究といえば、それに付随する伝承については folk system に迄掘り下げていることはあっても、技術そのものの folk system について分析を進めることについては全く欠けていたように思われるし、今後、文化人類学においてなすべきことのひとつであろう。

次に第三の点は物質文化研究にあたってのモノのサンプルのとり方の問題に関連してくる。従来、ある地域、特にあるムラに存在するある道具の型とか様式を、他の地域のそれらと比較するにあたっては、それぞれ両方の地域で at random に選んだ道具をとりあげて比較する場合が多かった。しかしそれでは甚だ不正確なのであって、たまたまサンプルとしてとりあげた個体どうしの比較となってしまう。ところが、その地域全体の様式を論ずるのに、どのようにサンプルをとるべきかについては案外考えられていなかった。この点で考古学のほうはトレンチで発掘されたものをすべてくまなくとりあげて分析しているのであり、物質文化の研究においてもこうした技法をとり入れ、「悉皆調査」を行うことが必要であろう。

アメリカのナヴァホ・インディアンの調査において J. M. Roberts は三つの世帯を選んでそれぞれの世帯のもつ物質文化をことごとく調査した。そして同じナヴァホの物質文化でも世帯によって変異のあることを指摘し、“household culture” という概念の存在を強調している [ROBERTS 1951]。彼の場合はそのねらいはやや異なるのであるが、しかし世帯を単位として、ことごとく調査するというその方法は注目されるべきであろう。ある大字の全世帯について衣服なら衣服、道具なら道具についてすべてを調べることがそれぞれの様式をみていくためにも必要なのであるが、こうした方法は今までに案外、欠落していたように思われる。この理由は甚だ簡単であって、物

質文化はただひとりの研究者が単独で調査する場合が多く、全部を調べあげることは不可能だったからである。その結果として、従来の研究では、たまたま行きあった古老に会ってその話を聞き、その所持する道具類をみせてもらうという方式であったため、そこにとりあげられたモノが偏っているか否かについての認定はあまりなされぬままに終わってしまったように思われる。

この点からみて甚だ注目すべきは渡辺仁 [WATANABE 1975] が最近、ニューギニアで行った調査であろう。ひとつの部族に存在する弓なら弓をひとつ残らず、すべて調査している。従来、ニューギニアの弓についてその型を論ずる研究は極めて多いのであるが、その内部における変異その他は彼の研究ではじめて明らかになったとも言える。

なおこれに関連してもうひとつここで述べられるべきは、さきにもあげた今和次郎の考現学の方法である。今までの人文科学・社会科学の立場からみると、一見、甚だつまらなくみえるような問題についても、ある時点を切ってことごとく調べ上げて記録する。民家なら民家の調査というときにはその家のなかに存在する道具類のすべてを精密にスケッチで記録していくのである。こうした研究方法もまた学ぶべきことだと言えよう。

但し今和次郎の考現学はもともとは住宅改善・生活改善という、極めて実践的な問題意識が最初にあったのであり、もしはっきりした問題意識ないし、研究者の仮説などが存在しない場合にはいくら悉皆調査をやっても意味がないといえるのであって、従来、世帯ごとに、あるいはムラ（大字）ごとに悉皆調査をしようというところの多くが失敗に終わっているのはこのためである。第一、日本全国のムラのなかからどこを選ぶか決めるには、結局、その場合の問題にしたがって選択を行わなければならないのである。

こうしたみかたに対して、むしろ相反する意見として、このような悉皆調査は必ずしも最初から問題意識によって問題を限定する必要はないというみかたもまたある。すなわち、こうした調査によって、ある地域の、ある世帯の、そしてある時点における道具類がことごとく記録されたとしたら、その記録自体が重要な意味をもつのであって、そこから新しい問題を発見することもできるだけでなく、別にその記録をどう活用していくかは他のそれぞれの異なった関心（問題意識）をもつ研究者にまかすことも可能だと言えよう。今和次郎の考現学や、また最近あらたに提唱されている「風俗研究<sup>10)</sup>」など、その多くの部分が単に趣味的で、目的意識がはっきりしないという

10) 「風俗研究」については京大人文科学研究所・多田道太郎研究室に事務局をおく現代風俗研究会で発行した『現代風俗 '77』（第1号・1977, 10月）を参照のこと。

批判と、それに対して記録自体が重要なのだとする意見との二つが存在しているのと全く同じ現象であるように思われる。

#### 4) 研究対象の問題：民具だけに限定すべきではない

それではここで最後に最も本質的な課題として、物質文化研究という場合の研究対象の範囲について論じておきたい。すでに述べたところにおいても触れられてある如く、わが国の民族学において物質文化研究というとき、それはイコール民具研究であった。民具がいつも中心におかれ、あるいは民具が殆ど大部分を占めていた。民具なることは先にも述べた通り、渋沢敬三によって提案された概念で、彼自身によって定義がなされているものであるが、その定義については学者の間で必ずしも全く同意が成立しているわけではなく、さまざまに異なった定義も提案されている。「庶民が昔から使ってきた生活用具」(中村)、「不特定多数の人間が作ったもの。すなわち anonymous なもので製作者の名がわからない点に特色がある」(大給)、「手づくりであるもの、一般多数の人が共有する技術で作られ、一般の人が使うことのできるもの」(大塚)などといった定義ないし説明が提案されており、また「生活用具であり、且つ民衆の生活のなかから生れ、伝えられたもの。そして郷土色の非常に強いもの」などといった定義も『新明解国語辞典』の中にみられる。

ところが日本における物質文化研究は、上のような意味をもつ「民具」にのみ研究の対象をしばりすぎてきたように感じられる。そのためにこの結果として、工業的手段によって生みだされた機器についての研究は完全に欠落してしまうことになった。しかし今後の文化人類学における物質文化研究は、庶民の手になるものだけに限る必要は毛頭ないのであって、美術工芸品の域に入るものもまた必要に応じてとりあげられる必要があろう。また手づくりによって出来たものだけに限る必要もなく、工業製品や大量生産された工業製品、大規模な施設(公園、都市、集合住宅、レクリエーションセンター)、設備(モノレール、地域集中冷暖房)などまでも、もっととりあげる必要がある。それらは家族生活、地域生活、都市的生活様式そのものをも変える役割を果たすものだからである。殊に現在の日本の社会を分析するとしたら、そこに充満している機械文明を切っていかなければならないのであって、文化人類学における物質文化研究の本領のひとつはそうした方向にあるように思われる。

例えばいわゆる耐久消費財などの研究も重要な課題と思われるのであって、耐久消費財の受け入れかたのパターンの地域比較研究〔総合開発機構・株式会社 CDI 1976〕、家屋の屋根の改造(カラートタンへの改造)や耐久消費財の受け入れ方のパターンと住民のパーソナリティとの関連性についての調査〔祖父江 1971: 149-156〕などが

すでにあるが、こうした部門に今後の新しい方向を考えることができるように思われる。またこのような近代の大量生産によって生みだされたものが、どのように社会や個人に受け入れられてきたかを考察する側面と共に、モノ作りの側面を同時に見ていく必要がある。すなわち技術の背後にある価値観に眼を向ければ、モノを作り出す設計の思想の考察が非常に重要となってくる。たとえば能率とか便利性を指向する考え方、個性化や手作りを指向する考え方、あるいは労働観など、それぞれ、いろいろなレベルで現代文化の価値観を解析するひとつの出発点となり得ると思われる。

それでは以下において大塚、中村、大給がそれぞれ行った具体的な研究事例を中心にしながら述べていくことにしたい。

## Ⅳ．具体的な研究事例をめぐって（その1）

### 磯漁具に投影された集団と個人

#### 1. 調査の主眼

北海道における磯漁の調査は、大塚が1976年と1977年の夏季を中心として行った。それは、礼文島では、北部の船泊湾岸の白浜、江戸屋、浜中、大備、五番地と、南部の香深<sup>カブカ</sup>である。利尻島においては、利尻町の新湊<sup>シンミナト</sup>と仙法志<sup>センボウシ</sup>、稚内市では、声間<sup>コエトイ</sup>である。さらに、積丹半島のつけ根にある余市町の港町<sup>シライワ</sup>と白岩において実施した。すなわち、調査は、図3に示した11地点に対して行ったものである。

調査地点を選択するにあたって、ひとつのめやすとした点は、現在さかんに磯漁を行っている集落であること、しかも、そこでの漁師の通年労働をみるに、磯漁に従事する期間（漁待ちの日数も入れて）が主体をなし、収量も収入も多いところとした。これらの条件に適した集落は、礼文島と利尻島の沿岸に集中しているところから、ここを調査の主対象とした。さらに、北海道本島と比較するために、礼文、利尻にほど近い稚内市と、遠く余市町のデータを収集した。

このたびの調査の主眼は、一定の仕事単位に、稼働するすべての漁具を抽出して集成図化をはかり、比較研究の基礎となる型式設定を試みるのがひとつである。これまで、漁具の比較があまりにも感覚的に行われすぎているきらいがあるためと、実測図の集成のなかからのあらたな読みとりも、それなりに有効であるにもかかわらずなされてこなかったもので、可能なかぎり行おうとしたものである。それとともに、漁具と漁法との関わりあい、つまり、漁具のありかたと、これを機能させる漁師（技術、くせ、好みなどを含めて）との関係を統一的、そして構造的に明らかにしていくため

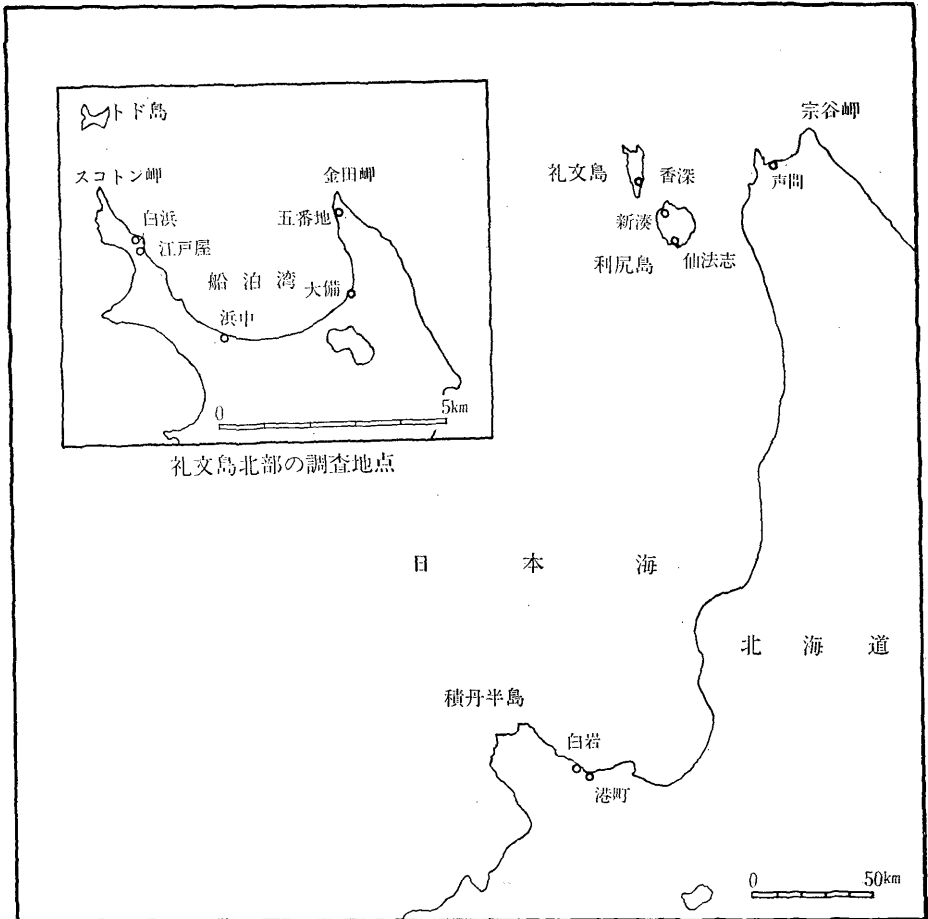


図3 北海道における磯漁の調査地点 (○印)

のひとつのアプローチをはかりたいと考えたのであった。

具体的には、ひとりの磯漁従事者が所有する磯漁具の全リストの作成とその実測図化の作業を行った。また、それらの磯漁具が、ひとつの仕事をなし得るときの組み合わせ方を、それぞれの仕事単位に把握した。この裏づけのために、浜やフナイリマにあるひとつひとつのイソブネに置かれた漁具の詳細な記録を行い、同時に、イエヤフナグラに置かれたものについても同じく調査を実施した。

調査対象とした磯漁具の範囲は、ヤスやタモなど捕獲対象に直接働きかける第一次的生産用具というべきものと、第二次的生産用具である、収獲物を加工するための道具(たとえば、ウニの殻を割ってミ<sup>11)</sup>を採り出す道具、乾アワビをつくる道具、岩ノ

11) 卵巣のこと。

りをつくる道具など)も含めた。さらに漁師が労働する際に着用する衣類や被りもの、さらに所持品も記録するようにつとめた。つまり、磯漁に従事しているとき、その人間になんらかの形で関わりをもっている道具のすべてを対象としていこうと試みたのであった。

また、磯漁を中心として、漁に関する知識の集積や技術の習得と伝達がどのようになされるのかも調査した。たとえば、魚の習性(泳ぎ方、棲息する場所など……)・天候・気温・海流などについてどのような知識をもっているか、どのような条件のときにそれぞれの捕獲対象物の所在を知りうるのか、それはどのように学びとったかなど、これらの事項のひとつひとつについて、聞きとりで記録した。

それからまた漁具を使う際のコツ、こまかな漁師個人レベルの工夫のありようを特に注目した。そして、同じ道具を使ってもある人はたくさん採れ、他の人は全く採れないといったことがいくらかでも起るが、それがどのようなことに起因しているかを追求した。

## 2. 漁獲対象と漁具

礼文、利尻両島の磯漁は、現在、〈四大種目〉とよぶ、コンブ、アワビ、ウニ、ワカメを主対象としている。稚内の声間は、コンブ、ウニ、ワカメ、余市地域はウニ、アワビが主要な漁獲対象である。このほか、磯漁による漁獲対象種目を地点別にまとめたものが、表1である。漁獲対象の商品性の有無と収量の多寡などによって、およそ三つにランクづけした。それは、主要なもの、補助的なもの、自家消費的なものとなる。このランクは、あくまでも、それぞれの調査地点における漁獲の実態の平均的なありようである。現在、北海道全域でみても、コンブ、アワビ、ウニが、他の漁獲対象となる種目とくらべて、とびぬけて高い商品性をもっているため、磯漁は、これらのみを対象としているといっても過言ではない。他の種目では、たとえ収獲量を多くあげたとしても、収入がそれほどならず、採算割れしてしまうため、漁獲の対象としないのである。

礼文、利尻両島においては、〈リシリコンブ〉の名で広く知られるコンブをはじめ、ウニ、アワビが主体である。コンブは、北海道では他にも有力な生産地域があるが、ウニは、この両島の漁獲量のみで全国生産の60%以上を占めているとのことである<sup>12)</sup>。アワビは、近年、船泊湾西部の岩礁地帯に良好な漁場が維持されているが、他の調査地点では、生息数がかなりすくなくなっている。

12) 宗谷支庁水産振興課調べ。詳細な生産額は本報告に掲載する予定である。



表1 地点別にみた磯漁対象種目  
(◎主要漁獲：○補助的漁獲：△自家消費的漁獲1976～1977年現在)

種目	礼文町						利尻町		稚内市	余市町	
	白浜	江戸屋	浜中	大備	五番地	香深	新湊	仙法志	声問	港町	白岩
こんぶ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		
わかめ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
のり(岩のり)	○	○	○	○	○	○	○	○			
てんぐさ	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
もずく	○	○	○	△	△	○	○	○	○	○	○
ふのり	△	△	△	△	△	△	△	△			
あわび	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◎	◎
つぶき	○	○	○	○	○	○			○		
ほっき	○	○	○	○	○				◎		
いがい(ひるがい)	○	○	△	△	△	△	△	△	△	○	○
えぞばばがい	○	○	○	○	○					○	○
しろがい										○	○
うに	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
なまこ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
たこ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あぶらこ	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
てっくい	△	△	△	△	△	△	△	△			
かれい	△	△	△	△	△	△	△	△	△		
がや	△	△	△	△	△	△	△				

声問は、コンブとウニが主体であり、アワビは全く獲れない。近年ホッキの養殖に力を入れてきた結果、かなりの資源回復をみている。

余市地域は、コンブはほとんど生息せず、ウニとアワビが収入全体の約70%を占めている。

調査地域における現在の磯漁対象種目のありかたは、およそこれまで述べてきたごとくであるが、歴史的にみるとかなりの変遷をたどってきている。

礼文、利尻両島および稚内地方のコンブの主体をなすリシリコンブは、体長2-6m、巾20-25cm、厚さ3mmほどのもの。マコンブと同種であり、これより色が黒く質が固いとされているが、商品としては上質である。コンブは、すでに江戸時代から北前船で京畿に送られ、リシリコンブの名で知られるほど主要な生産対象であったが、現在もその地位はかわらない。

北海道のアワビは、エゾアワビである。アワビも江戸時代からカンポウ(乾鮑)に加工されて出荷されたが、1960年代に入ると、生きアワビが中心となっている。現在

では、カンボウはごく少量しか生産されていない。

ウニは、エゾパフソニとエゾムラサキウニの2種で、前者は<ガンゼ>、後者は<ノナ>と呼ばれている。ウニはかつて、コンブを食べるため、害のあるものとしてきらわれ、駆除の対象にさえされた。わずかに自家消費的にヤキウニなどにして食されていたが、大正時代に、利尻、礼文両島にツブウニをそのまま塩蔵にして保存する方法がもたらされてから、遠隔地に送ることが可能となり、商品としての価値がはじめて付与された。塩蔵ウニは、昭和10年代に大阪で、立飲みの焼酎一杯にもツキダシとしてサーヴィスされたほどに、比較的安価なものであったという<sup>13)</sup>。近年では、嗜好者層が拡がり、需要は大きく、価格もおどろくほど高い。また、塩蔵ばかりでなく、保存技術や輸送手段の発達により、生ウニのままでも市場に出荷されている。

ホッキは、かつて、砂質の浅い海である船泊湾に多量に棲息していたが、現在ではきわめて減少し、ここ数年禁漁にして資源の回復をはかっている。

ナマコは、江戸時代から良質なイリコ（乾海鼠）に加工されて、多量に出荷された。かつてイリコは、コンブ、カンボウとならんで重要な位置にあり、これは長崎俵物のひとつとして、中国にもさかんに輸出されていたが、不幸にも太平洋戦争によって貿易が途絶えてから、現在でも生産はほとんどとまっている。漁師によると、資源量はそれほど悪くないというが、今日わずかな量が生で出荷されるのみである。

テングサも太平洋戦争前までは、非常に需要が多く、商品性をもっていたため、さかんに採取された。しかし現在では、安価な外国産のものが多く輸入されていることと、資源状況自体も振るわないため、ほとんど採っていない。

このように、かつて磯漁の主要な地位にあったナマコやテングサなどの凋落にみるように、対象種目にもかなりの変動がある。当然のことながら、これらを収獲する磯漁具にもかなりの変容をひきおこしている。つぎに磯漁具の変容過程を、おおまかに述べておきたい。

コンブ：根元の部分はネコンブとして、良質な一等コンブと同価格で取り引きされるため、根をつけたまま岩盤からねじり採られた。この道具をネジリといい、カマによる刈り採りとあわせて行った。このネジリの古いタイプは、二本の棒の先に、真中に礫をつけた70-80cmほどの長さの紐を結びつけたものである。次の段階には、一本の棒の先に直角に短かい横木をとりつけた、T字形をなすものや、先端に二本の枝木を八の字状にとりつけたものがあらわれる。さらに、近年では、鉄棒をラセン状にまげたグリングリンとよぶものが考案されて用いられている。ネジリだけを見ても3

13) 礼文島大備, T. O. 氏談。

～4段階の推移があり、カマやカギなど、他のコンブ採集用具とあわせみると、その変容はより顕著になるが、詳述は本報告にゆずりたい。

アワビ：古老によると、かつてはヤスで殻の上から突き刺して採ったということである。事実、礼文島浜中の江戸後期に形成されたとみられる貝層の観察では、いずれのアワビもヤスで突き貫かれた独特の小さな方形孔を1～3個もっていることから裏づけられる。ヤスは、先の尖った鉄片を3本束ねたもので、同様のものは現在でも用いられ、サンボンヤス（三本ヤス）とよんでいる。ヤス採りによるアワビは、臓器を破損されるので、じきに死んでしまうが、カンボウに加工するのであればさしつかえなかった。しかし、生のままイキアワビとして採取するには適した道具でないため、小さな網ですくうタモ採りやカギ採りが行われるようになった。ことにカギ採りは、余市地方では遅くとも昭和20年代には行われていたらしいが、礼文島では昭和40年代にならなければ普及しなかったということである。このようにアワビ採り用具をみても、大きく二つの変容過程が存在することが明らかである。なお、磯漁具全体の変容については、別の機会に述べたい。

ここで注目しておきたいのは、礼文、利尻両島のサンボンヤスのあり方である。ここでは、サンボンヤスに、柄と柄をつなぐ金具の役割もさせる。この方法は、きわめて合理的なもので、図4-1・dの先柄<sup>14)</sup>のように、その末端を断面三角形にしておき、その部分をサンボンヤスに挿入すると密着して容易に離脱しないしかけである。アワビカギであれタモであれ、自由に先端をかえて柄本体に装着させることができる。また、深みの獲物をとるために柄を長くしようとおもえば、2本でも3本でもつなぐことが可能である。このように、接合金具としてサンボンヤスを用いることは、現在でもさかんに行われており、ことに先柄と柄をつなぐときの一般的用法である。しかし、柄と柄をつなぐときは、近年では金属製の筒をつかうことも多い。この場合、柄の接合部は斜めに切断されている。サンボンヤスをつなぎにも用いるようになったのは、少なくとも大正時代よりも古いらしいが、詳しいことは不明である。また、礼文、利尻両島では、柄の材料は流木を拾い、自分で丸い棒状に削って用いていた。近年ではいくらか、竹や合成樹脂製の柄を用いる例がみられるが、やはり木製のものが多い。なお柄のことをホコという。ホコとは、柄のついた漁具全体をさす場合もある。

### 3. 磯漁技術と漁具の個人差

磯漁においては、人間もまさに道具となると言ってよい。つまり磯漁は、たったひ

14) 二つの名称については後述する。

とりで行うのである。磯漁に従事する者は、両手に漁具をもち、ノゾキバコを口にくわえて海底に眼をこらしながら、右片足で櫓を漕ぎ、左片足と腰と胸で転落しないように全身のバランスをとらなければならない。ノゾキバコにしても、口にくわえるだけでなく、頭の重みをいくらかかけて、ガラスを少し沈めて固定し、首を動かすことによって視野を移動させていくため、首筋が疲れるとのことである。磯漁に従事するときの姿勢は、きわめて無理な形をとらねばならぬうえに、しかも全身を機敏に、的確に動かして獲物を確実にとらえなければならない。

たとえば、ウニ採りのときは、ホコの先にウニタモとよぶ小さな網をつけたものを片手に持ち、もう一方の手にサンボンヤスを握る。きき腕が右であれば、右の手にもったウニタモの先端の杵で、ウニ殻の縁からいくらか内側の一点を突く。この突き具合がよければ、ウニは岩礁から離れて、わずかに浮く。そこをすかさずタモですくい採るといふ。しっかり岩についたものは、ヤスではがしてタモですくう。タモのきかない岩の割れ目や穴などにいるウニをとるときは、ヤスで突き採る。タモのなかにウニがたまったら、舟の上にあける。深みのところにいるウニを採るときは、別に用意してある長いホコをつかうか、なければその場で急いで短いホコをつなぐ。磯漁は、なぎのときでなければ海がにごっているため出漁しないが、それでも舟は波でゆれる。せいぜい直径 5-8 cm ほどのウニは、水深 7-8 m 前後でみると、豆つぶ位の大きさにみえるという。波で舟が流されないよう、片足で櫓を漕ぎながら、タイミングよく瞬時に獲物を採るさまは、人間がマシーンと化していると言ってよいであろう。

このような労働状況であるため、個人的な技術、熟練度が、とくに大きな役割を占める。礼文島の船泊湾沿岸では、熟練度の高い漁師はホンリョウシ（本漁師）と称されて、ハンリョウシ（半漁師）に相對し、ウニであれば、同じ一定の時間内に操業して前者は後者の3倍以上もの収穫をあげることも稀なことではない。たとえば、大備の漁師は、浜中からスコトン岬にかけての根からの漁師に対して、“あちらはホンリョウシだから”と収穫が少なくとも一種のあきらめと畏敬の念を持っていることが、ひしひしと感じられた。大備は、船泊湾岸の中心な街であり、いくらか都会的の氣質が養われていることや、親子代々の漁師でない人も目立ち、中年以降になって島に帰ってきてから、磯漁を始めた人さえある。逆にホンリョウシのハンリョウシに対する優越感著しく、ハンリョウシに絶対に負けるものか、負けられないといった競争心が強く働いている。

このような技術、氣質あるいは収穫の差が彼らの所有する道具のうえに、どのような差をもってあらわれるであろうか。この問題は充分な分析を終えていないが、ひと

つの傾向としていえることは、ホンリョウシの方がハンリョウシよりも、漁業組合からできあいの漁具を求めめるのではなく、鍛冶屋に注文してつくらせる比率がいくらか多いなど、相対的に上等な漁具をもっている事実である。また、予備の品を多くもっていて、ふんだんに道具を使用する。おしなべて漁具倉も立派である。また、漁具の手入れもはるかに念入りであるようにみうけられた。

磯漁具は、鍛冶屋での注文にせよ、漁組から既製のものを購入したにせよ、かならずそのままの状態では使えないし、使わないことがほとんどである。ここでは、どのように各漁師が自分の好みに応じてつくりかえるかという点を、アワビ採り用のカギを例に述べてみたい。アワビカギの場合、 $\cap$ 字形のカギの部分だけは、漁組が仕入れたものを各自が購入している。しかし、手打ち製品であるため、全く同一形状のものはないので、自分で選択することになる。また、カギの組立てに必要な部材であるミズイト（水糸）、ハガネ板、ゴム板、ビニールテープなどはいずれも既製品であるが、それらをどのように用いて自分に使い易いアワビカギに仕立てあげるか、各自の創意工夫のあとが極めて明瞭にみられる。例えば、新しい強力接着テープや丈夫な糸が店頭に出ると、それをすぐに求めて巻きつけてみる。ことに、いままででない色テープは興味をひくらしい。色テープはカギの所在を明瞭にしてくれるであろう。しかしカギ本体には、鉄の地肌そのまま、塗料もぬっていない。そして、それらがどんな効果があるか実際試してみるという。漁具によせる関心は、われわれの想像以上である。いずれにしても、漁師は少しでも自己の収穫をあげようと、不断の努力をしていかなばならないのである。

漁具のつくり方のひとつの具体例として、アワビカギをとりあげたい（図4参照）。図5でみるごとく、アワビカギの根元は、およそ三角状をなす、薄手のつくりとなっている。ここに、図4-1aのカギを1'bのハガネ板の先端に合わせて、ミズイトで入念にしばった上をビニールテープで固定する。bの部分は、ハガネ板を一枚でなく、二枚重ねにする例や、ハガネ板にゴム板（厚さ3mmほどの比較的硬質なもの）を重ね合わせる例もある。余市では、弾力性の強いクジラの骨を用いる例が多い。bのハガネ板は、ミズイトとビニールテープで先柄に装着される。先柄と呼んだのは、漁師が握る本来の柄ではないからである。bと、先柄dの接合部は、釘などを用いないものが主である。cは、ミズイトでハガネをすこし引引っ張ってある。これは漁師が柄を押しつけるように力を加えると、ハガネをしならせて強力なバネの役割りをなし、アワビを起す際に、瞬時に強い力となってもどるとき、カギがあまり振れるとアワビがはずれてしまうために張ってある糸である。振れもどしをやわらげ、少なくするし

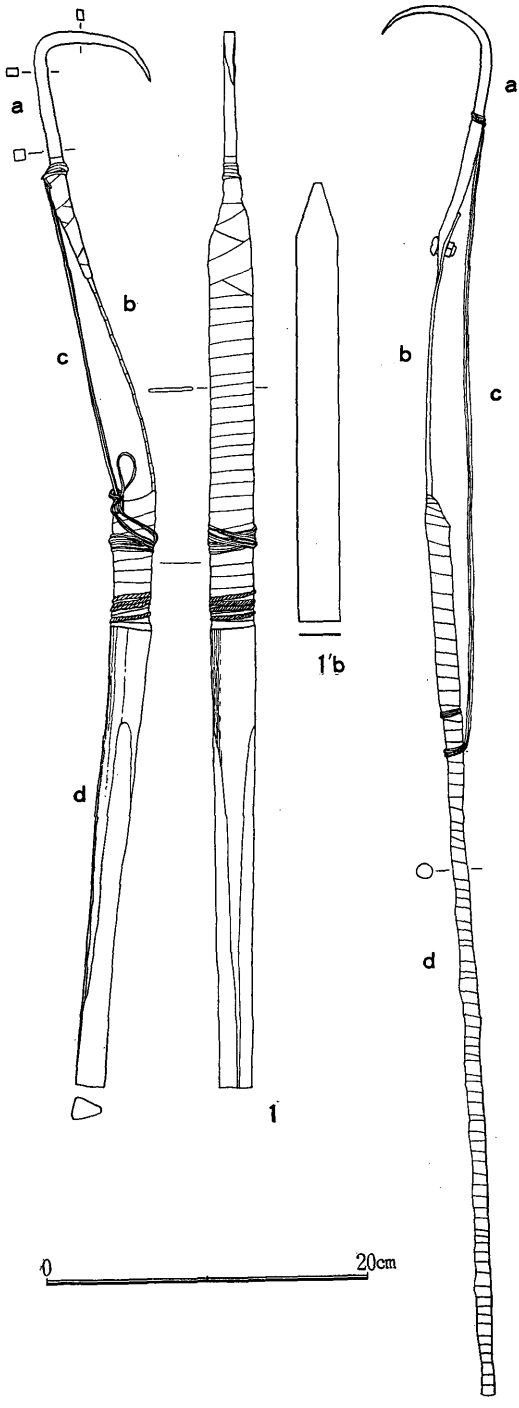


図4 アワビカギの着装形態  
(1. 礼文島大備)  
(2. 利尻島新湊)

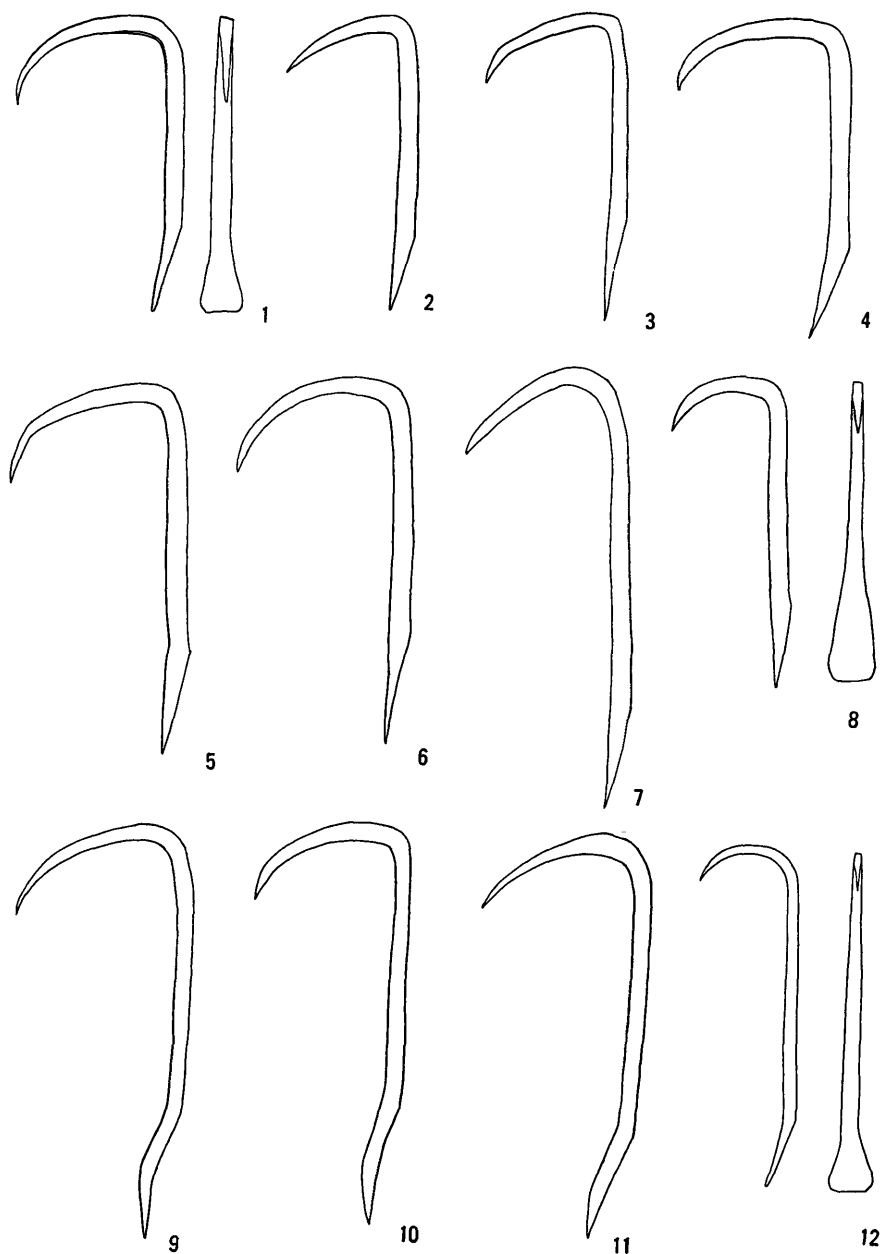


図5 アワビカギ（縮尺1/3）1～7礼文島大備，8. 礼文島五番地，  
9～11利尻島新湊，12. 余市町白岩

かけである。しかし、このcをとりつけない漁師もいる。この場合は、bの部分に弾力性の強いハガネ板を用いずに、合成樹脂（塩化ビニール）のパイプを細く板状に切りとったものを付けた例もある。dは、流木を加工した棒で、これが柄とつながれる。図4-2は、前述のタイプとはいくらかちがって、aはb（厚さ3mmほど）とビスで留められている。cのミズイトは前述のものと同様であるが、dの先柄は鉄棒でつくられている。

図5は、それぞれの地域の漁師が工夫して、もっとも獲り易い形にしたアワビカギである。とうぜん、カギ先は、それぞれの個人レベルでの差異が微妙にあらわれてくる。したがって、カギ自体の観察だけでも、カギが使われている状態、すなわち、獲物にカギが働きかけたときのカギのメカニカルな動きを知ることにも可能である。

#### 4. 漁具にみる漁民社会の基本的性格

漁民社会は、採集狩猟民社会と類似しており、自分たちがモノを生産する社会ではないため、獲物の有無や天候に左右され、その経済的安定度は農村に比べて低く、刹那的となり易い。この点が漁村のもつ基本的性格であり、そのためにこそ自分の技能で支えられた現金収入の額が最も重要な問題となる。そして漁民の場合、自分の収入の額により、例えば神社への奉納金の多寡が決まり、部落内におけるランキングも決定されてくるなどの結果が生まれ、農民社会よりはるかに非固定的な点が特徴である。これに関連して、所有する漁具と、それに加えられる創意工夫の個人差の度合は農民社会における農具のそれよりは、はるかに顕著であることをとくに注意すべきであろう。道具と人間との一体化という点は、農民社会では考えられないほど極限にまで到っているといつてよい。

なお、こうした漁業民の特色は日本だけのことではなく、世界的に普遍的にあてはまる事実だと言つてよいであろう。農業民の場合、新しい技術を用いて農業をやってみても、その結果がはっきりわかるのは収穫期がくる数か月後のことであり、しかも、もしその作付けに失敗したら収穫は全く手にすることができないことになってしまうので、大きなリスクをかけて新しい技術を導入する気にはなりにくい。このために彼等は保守的になり易い。これに対して漁業民の場合は、その日に導入した新しい工夫の結果が、その場ですぐにわかるのであり、また毎日毎日少しずつの収穫が得られる

15) なお、祖父江はかつて北海道の漁民について、ロールシャッハ・テストによる調査を行つてみたところ、「強い不安、人間関係における不安」の存在を示す結果が出たことを指摘している【大島 1977: 208-9】が、これなども漁民における生活の不安定性、相互間の競争性から生れた特色なのかもしれない。



わけなので、それほどリスクをかける必要はない。かくて漁民は日常的に工夫をとり入れ易いのであり、この点は世界に共通した特色とみてよいであろう<sup>15)</sup>。

しかし、こうした特色は逆にいえば、前に触れたごとく、非常に<刹那主義的>ともいえる性格をも明らかに生みだしている。礼文、利尻両島の場合についていえば、年間所得は平均400~500万円、多い家では1,000万円を越え、生活はかなり安定している。それに反し、精神的には不安定であり、つねに明日はどこの磯に舟を出したらよいか、出漁の合図の旗がいつあがるかわからないまま体調を一定に保つこともかなりの努力であるようだ。さらに自分の行っている磯漁の継承という点に関しては極めて悲観的であり、自分のこどもには今の仕事につかせたくないという者が多いのである。こうした姿勢のあらわれとして、50代後半の漁師の間でイソブネを新調する者は皆無であり、漁具も丹念に調整して使う。また、自分の道具を人に触れられるのを非常にいやがり、触れられると魚がとれなくなるとすら感じている。こうした点に彼らの道具に対する態度の特徴がよくあらわれていると言えよう。

このような漁具についての工夫は、自分の子供に対しても決して教えることはない。漁民たちはすべて見よう見まねで、自分でつくっていく。とくに漁師の家に生れたという環境のなかで、父や祖父の漁具をまねながら自分で工夫していくのである。こうして漁具においても微妙なところに個人差が生ずるのであり、三本ヤスの開き方、ミズイトやテープの巻きかた、先柄や柄の装着のしかたなどにみる変異は極めて大きい。素人がみればすべて同じにしかみえないようなところにも、ひとつひとつ微妙な差異があり、しかも漁師がみれば、この漁具はどの程度の腕の人が使用してきたものであるかをすぐに判定してしまうのである。このような点からも明らかのように、漁具の場合は極めて「自己完結的」な性格が強く、自分の道具は自分で工夫して作ったものでなければ使用し得ず、他人から借りてきたものを使うなどのことは全く不可能なのである。また、他人から教わった技術の上に安易ののっかることもあり得ない。自分の体験によって少しずつ改良を重ねてきた道具と技術を使用することによってのみ豊かな漁獲が可能なのであって、その意味では、自分のライフ・ヒストリーと自己の保有する道具の歴史とは完全に結びついていることになる。そして事実、彼等はは以前に使用した道具は破損したとしても捨てずに持っている場合が非常に多い。道具に対する自己の愛着はかなり強いのである。

これまでに触れたように、漁民ひとりひとりの自負心は強く、したがって相互間の競争心はかなり強いものがあるように観察される。そして、競争相手がよく獲れているのに自分はいっこうに獲れないというとき、ことに、ホンリョウシの場合に衝撃は

大きく、かなりのあせりをかくそうともせず、それへのさまざまな対応がとられる。エビス信仰など、信仰にたよる場合も少なくないが、より内面的にさまざまな工夫が試みられるようである。

道具の作りかたにおいても、競争が強く存在するようであるが、しかし道具の工夫は無限に行い得るわけではない。アワビ採りなら、組合の規制で採ることの許されるアワビの大きさが決まっているばかりか、道具も漁期によってタモあるいはカギに使用を限られている。道具の形状自体も一定の枠がはめられており、工夫の範囲も限られてくる。

## V. 具体的な研究事例をめぐって（その2）

### 生活用具の分布：平野村の場合

#### 1. 農業の地域類型と農具の型

ここでは農具の問題について中村の研究を中心にして論ずることにしたい。地域農業の型の問題、特に農業の地域類型については農学でも人文地理学でも研究が行われているがしかしまだ完全とは到底言えない。他方、農具の類型と上記の地域型とがどう関連し合っているかについても江戸時代から関心もたれ、さまざまな角度から考察がなされてきているのではあるが、不十分な点が少なくないし、未解決の問題はなおあまりにも多く残っている。殊に近代的な農学においては、当然土壤改良とか農業機械などにもっぱら興味をむけ、伝統的な農具の形態とその分布についての研究にはあまり注意がむけられてはいないように思われる。なお伝統的な農具についてはすでに江戸時代から「農具便利論」をはじめ、いくつかの文献が出ており、明治以降もさまざまな文献が刊行されている。それで農具についてはすでにすべてが研究済みとみなされてしまい、そのため反って研究が進まぬまま残されているきらいがある。今回、あらたに農具についてとりあげることにしたのはこのためである。

この農具を考察するにあたっては、〔農具の型→農業の類型→地域の類型〕といった相互関係を考えることになるが、平野村の場合、巨視的にみれば、自然的条件、殊に土壤や地形的条件が広い範囲にわたってほとんど同じとみてよい場合があるため、ひとつの農業の型が広い範囲にわたってひろがっている点を特色としてあげることができることを、まず注目しておいてよい。

こうして成立した農業の型に対応して農具の型ができあがっているわけであるが、

この点について考えるためには一般的に言って、近世には民具はそれを作る人によって次のような諸型に分れてきたという事実を指摘しておかねばなるまい。すなわち、1) 自分で作りだしたモノ、2) ムラの職人が作るモノ、3) 町の職人が作るモノ、4) 御用職人が作る場合（殿様に労役奉仕をしたり品物をおさめるような高い技術をもつ人たちが作ったモノ）。

農具の場合にはムラの職人が作る場合が多く、こうしたムラの職人たちは農業に従事するかたわら民具を作りだす。かくて、農具を作る側がいわば使う側の間に埋没した形になっているため、作る人たちは使う相手方の事情をよく知っていて、その地域の農業の型によく合ったものを作り出す可能性にめぐまれている。こうして作られたものがいくつか重なっていくうちに、一組の農具が特定の分布圏を生み出すことになる。

なお平野の場合、農業だけでなく、他の生業も行っていて、複合的な生業形態をもつケースが少なくない。特にいわゆる「コメとマユ」の農業に集約される以前の明治中期迄の農業はそうした形が特徴的であったわけで、こうした複合構造における農業の占めるウェイトについてもいちいち明らかにしておかなければならない。なお平野部において、もうひとつ重要な特徴は車や大型の背負いハシゴやテンビンのような手軽に大量の生産物を運べる運搬手段が発達したことである。

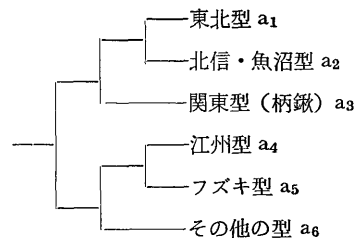
さてこうした視点に立って農具のひろがり論を論ずるとき、ひとつの農具を指標にして文化の地域型のひろがりやをどこまで追究できるかが根本的な問題となるが、とりあえず、ここではスキ（鋤）とクワ（鍬）をとりあげることにする。

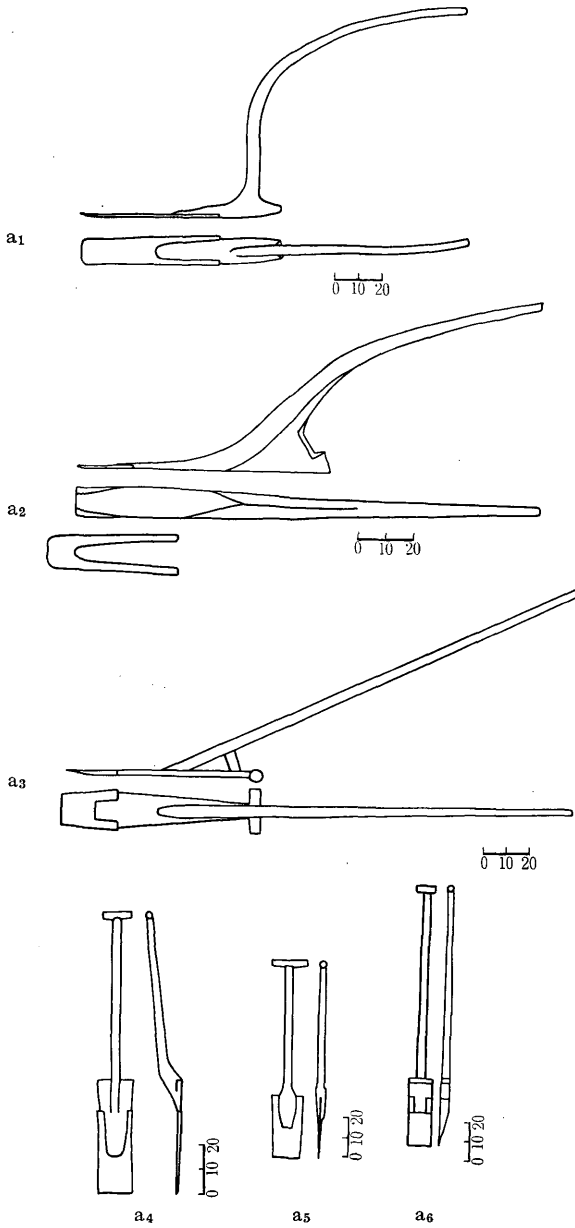
## 2. スキとクワの型：ひとつのこころみ

ここでまずスキについては表2に示す如く6つの型に分類する。スキの分類については従来もなされてきているが、はっきりした形ではまとめられていなかったもので、以下これにしたがう [中村 1972]。

これに加えて a4 では、湖南型、輪中（わじゅう）型、東海型という分類も考えられる。ここでまず湖南型とは a4 の江州型スキを使用するもので、二毛作に、輪中型は関が原をこえていわゆる美濃三川の下流域の地帯で使うものであり、二毛作を伴ない、高ウネを作る。次いで名古屋以東には東海型がある。こうした分類が

表2 鋤の型の分類





- a1 岩手県下閉伊郡普代村〔本館蔵〕
- a2 新潟県南魚沼郡六日町〔飯綱考古博物館蔵〕
- a3 埼玉県北入曽の柄鋏〔武蔵野郷土館蔵〕
- a4 滋賀県大津市上田上牧町の江州鋏
- a5 神奈川県葉山町のフズキグワ〔葉山町観光博物館旧蔵〕
- a6 長野県長野市吉村のホン

図6 スキ（鋏）の諸形態

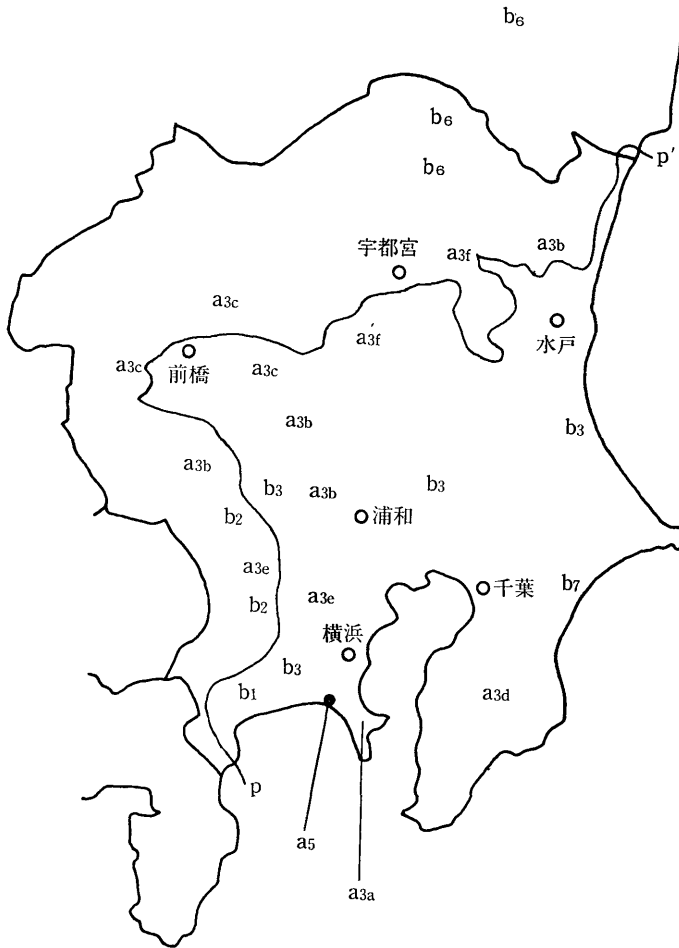


図7 農具と農業類型，関東地方を例にして

a. スキ農業（図6 a<sub>3</sub> 参照）

- a<sub>3a</sub> 三浦半島の柄鋤（a<sub>3b</sub>の枝型）地帯
- a<sub>3b</sub> 関東型の踏み鋤（柄鋤）地帯
- a<sub>3c</sub> 上州の柄鋤地帯（柄鋤の発達した地帯）
- a<sub>3d</sub> 房総内陸部の柄鋤地帯（a<sub>3b</sub>の枝型）
- a<sub>3e</sub> 多摩の柄鋤地帯（小型の柄鋤地帯）
- a<sub>3f</sub> 栃木・茨城の柄鋤地帯（柄鋤のもっとも発達した地帯）
- a<sub>5</sub> 葉山のフズキグワ農業

b. クワ農業（図8 参照）

- b<sub>1</sub> 秦野地帯
- b<sub>2</sub> 関東山系の山間稲作地帯
- b<sub>3</sub> ヤツ田農業地帯
- b<sub>4</sub>~b<sub>5</sub> 典型的な畑作農の地帯（省略）
- b<sub>6</sub> 柄の短い鋤（図8 1, 2の枝型）をつかう地帯
- b<sub>7</sub> 九十九里の湿地帯

たとえば、このようにして、各地域の農業を主要な農具を指標にして図表化してゆくことができる。

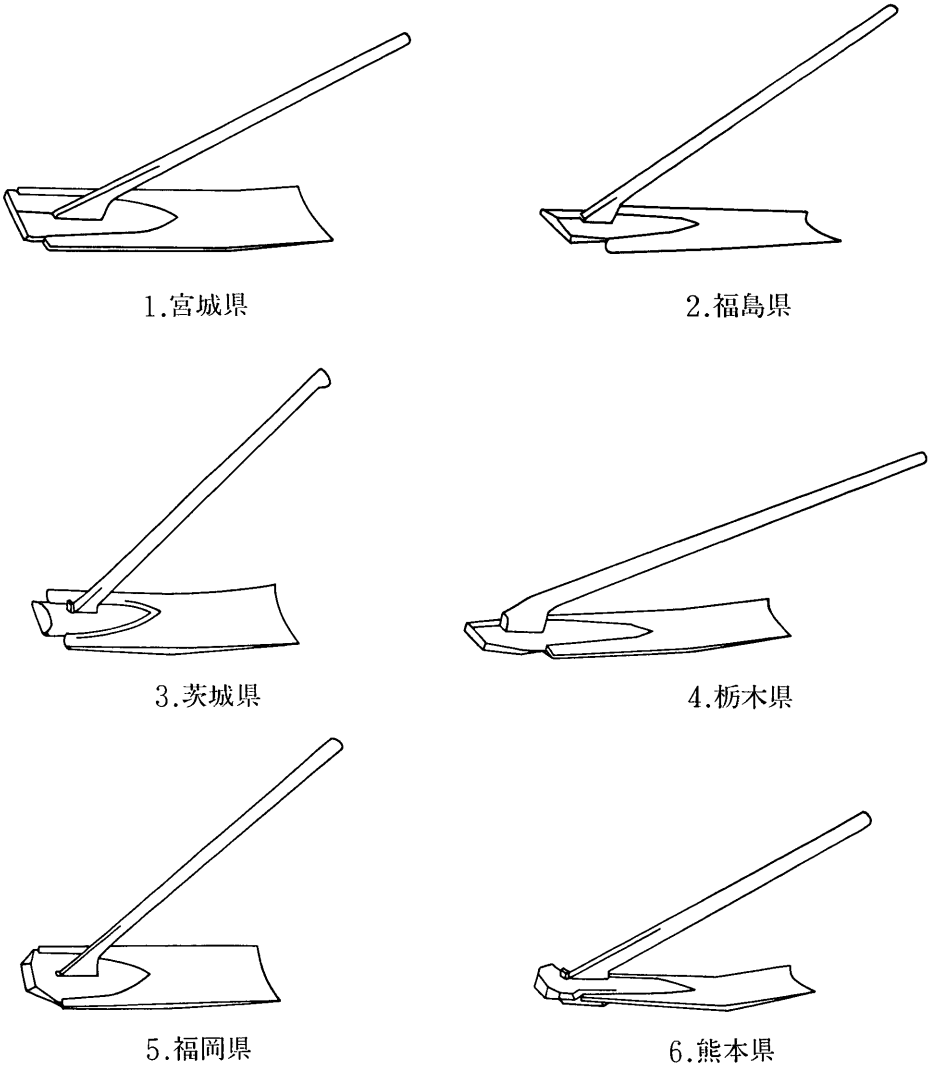
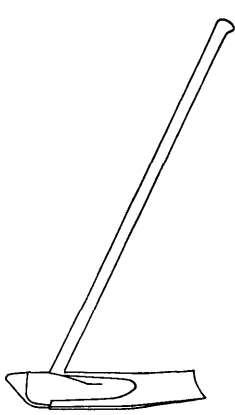
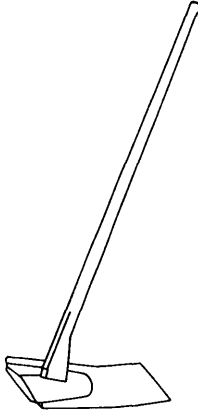


図8 『鋏之図鑑』によるクワ（鋏）の諸形態

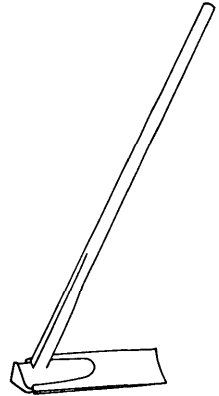
- 1, 2 は東北地方の柄の短い型のクワの例。
- 3, 4 は関東地方の柄の短い型の例。
- 5, 6 は福岡・佐賀・熊本地方の柄の短い型の例。
- 7 から12までは中間型柄の長さも刃の長さも、それほど長くない型の例。
- 13から15までは柄の長いクワの型の例。



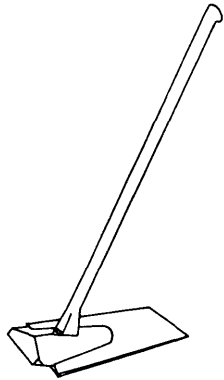
7.岐阜県



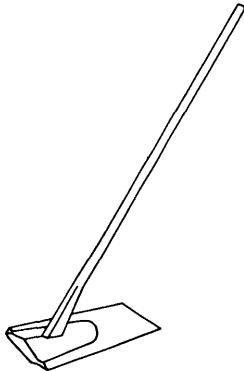
8.富山県



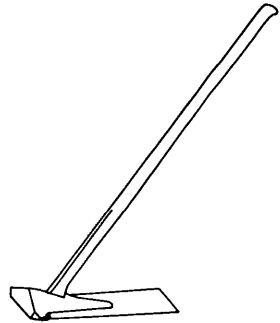
9.三重県



10.京都府



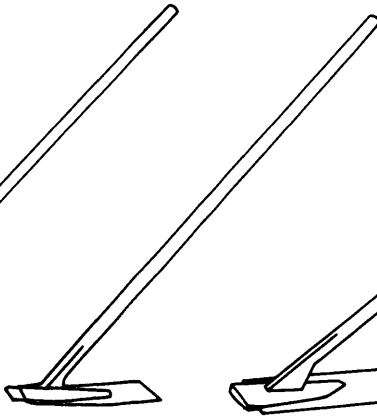
11.兵庫県



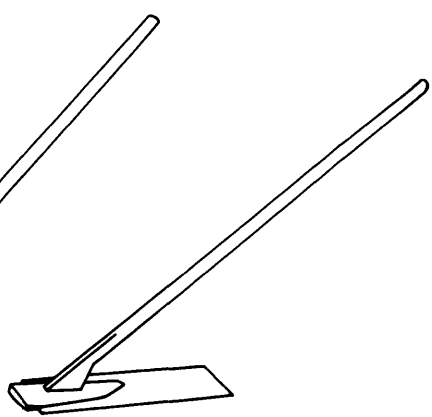
12.奈良県



13.岡山県



14.和歌山県



15.宮崎県

今まであまり行われていなかったのは、従来の民具の研究がクワならクワだけについて行われ、クワを伴う農業の全体についての吟味が行われなかったためである。

なおこれらを複合させたのが図7であって、関東地方におけるスキ・クワ農業の分布を示した。ここで pp' は山陵線を示し、この線より左がほぼ山間地帯、右が平野地帯である。この図でまず a<sub>3a</sub> は三浦半島の先にある関東型のスキを伴った農業であり、a<sub>5</sub> は三浦半島のつけ根（葉山町）にあるフブキ型の鋤を伴ったもの。その上の b<sub>1</sub> は秦野市を中心とした土のよい地帯でクワとウネタテの道具の非常に発達した地域である。次に b<sub>2</sub> は山岳地帯から武蔵野の平野に流れていく小さな川（東京でいえば秋川、荒川上流の名栗川など）の流域で行われる稲作で、肥料のやりかたに著しい特色がある。b<sub>3</sub> はいわゆるヤツ田（ドブ田）で、昔は腰までつかるような場所の稲作であり、無肥で農耕することが可能だった。a<sub>3b</sub> は関東型の鋤を使うが、秩父的な特徴のあるものを使う。a<sub>3c</sub> は東京の多摩の関東型の地帯。a<sub>3c</sub> は群馬の養蚕地帯で関東型のスキを使用する。a<sub>3f</sub> は関東型のスキの最も発達したところで、非常に大きなスキを使用する。b<sub>6</sub> は鍬は鍬だが柄の極めて短いものを用いる地域で、東北地方の山形鍬から始まり、b<sub>6</sub> のウジエ鍬（氏家鍬）までつづく。なお鍬の分類についてはすでによく知られているかのように考えられているが、実はよく分類されているのはその刃の部分などについてのみであって、鍬の柄まで入れた全体的な分類はなかったのが現状である。

ここに出したのは宮城県立農事試験場が1935年に出版した『鍬之図鑑』（1911年〔明治44年、全国から収集したクワ106点をのせている）をもとにしたもので、この中で柄の長いクワは中国地方から瀬戸内海、そしてさらに九州地方にまでひろく分布し、これに対して柄の短いクワは山形、秋田、岩手の北半分から南下して宮城、福島、北関東地方まで分布している。その仲間は新潟などにも分布し、別に、柄の短いものは福岡と鹿児島の一部にも残っている。歴史的にどれが古い型であるかは非常に興味ある問題であるが、柄の短いのが古い型ではないかと考えられる。

b<sub>7</sub> は九十九里沿岸の非常に深い沼田の地帯、a<sub>3d</sub> は関東型のスキも使うが同時にそれと柄の短いクワとが結合した形をとる。このようにみえてくると農具の型によって地域型を分けることが可能となる。なお、自動耕耘機その他の器械類が入ってくると、同じ機種でもそれぞれの土地の条件によって使用法がどう異なってくるか、これもまた興味ある問題といえよう。



### 3. 農具の類型を把握するための方法論をめぐって

上記の分類に関連していえば、一軒の家で何種類もの農具をもっている場合、そのうちどれをティピカルなものとして考えるのが問題となる。その点で、先のⅣの海村の場合と同じく、悉皆調査<sup>16)</sup>ないしはそれに近い調査を行って偏差の程度をたしかめ、そのなかからティピカルな型をそれぞれの地区について求めることが必要であろう。もちろん、そのまえに、その地域の生活の仕方や農業のあり方から受ける地域的な相違を感じとることも大切である。

まず現地におもむいて、あの辺の川の流域の農業とこの辺の川の流域とでは違うのではないかといったことをまず直観的に感じとり、そうなるとこの辺ではこのような型の農具で行けるのではないかと考えてみる。ある生活用品が文化のひろがりを示すひとつの指標だとすれば、その指標が正しく実感とあっているかどうかを念のため、くりかえし吟味してみてもよいのではなからうか。しかしそれは一種の名人芸のようなもので、そのような名人芸で行くところにこれまでの物質文化の研究が一般に敬遠される原因があったのではないかと思われる。この点は他の文化要素の研究でも、あるいは考古学における場合とも共通しているように思われる。分析の上で、余りにも文字化できない部分が多すぎるとすれば、それはやはり問題があるといえる。holisticに文化の型を直観的におさえることは極めて重要で、したがって文化人類学はartであるという立場もありうる。物質文化においても、直観的な観察ということはやはり第一段階として重要なのであり、こうした観察の結果を資料により裏づけることはまた第二の段階としてそれ以上に重要なのである。

また農具の形は同じでも使い方のパターンが違う場合がある。そして農具のみならず、用具の形態と用途と、そしてそれらを支える技術との3つの間の結びつきが果してうまく説明できるか否かがここでも問題となる。

## Ⅵ. 具体的な研究事例をめぐって (その3)

### 物質文化の変遷過程：山村の場合

#### 1. 秋山郷の山村調査の対象と方法

山村の調査は大給により、長野県下水内郡栄村秋山地帯において行われた。

この調査においては、物質文化をひろく拡大し、「人間の再生産のために役立つ物

16) 前にも本文中で触れたいわゆる悉皆調査もサンプル調査の特別な場合と考えられるので、できれば統計的な手続によってサンプリングをして、必要な限りで調査するのが望ましい。

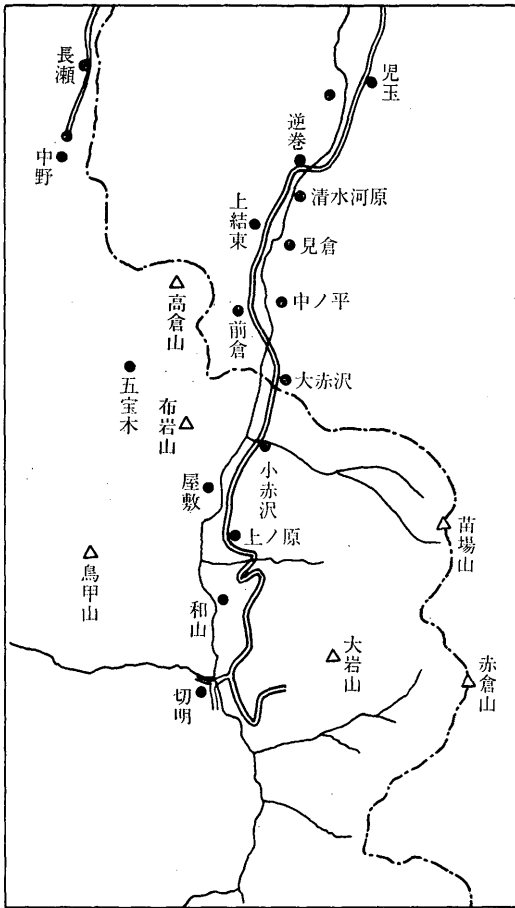


図9 秋山郷の部落配置図

的な手段」として考え、「人と道具の意味的 (semantic) な関係」を特に調査の焦点として考える。但しここでいう意味的關係とは、人間にとって道具がどのように認識されてきたかということである。具体的には道具のもつ属性がどのように把握され、考えられてきたかということである。それにははっきり「道具の機能」として意識されている面と、生活の中で、次第に無意識の中に沈澱していったような面 (たとえば道具のもつ象徴的側面など) をみていくことを眼目にした。そして、このことによって、物質文化の変遷はモノそれ自身の変化だけではなく、個人や社会におけるモノの役割の変化をも含めて把握しようとしたのである。秋山の調査は以上の視点から1976年8月、

1977年4月、9月の3回 (延22日間) にわたり、衣食住を対象として行った。特にこの秋山は20年以前までは文字通りの「秘境」として知られていたところであるが、最近におけるいわゆる「秘境ブーム」「観光ブーム」の結果として、急速に変化をおこすこととなった。その意味では日本のムラのなかでも変化の速度が著しく大きい例とされているので物質文化 (衣食住) の変遷の歴史を軸として考察してみることにした。なお同じ山村でもこのような変化が少しも訪れていないムラはむしろ多数を占めると思われるので、ここでは特に変化の異常に急激であった山村の特殊例をとりあげたことになる。

物質文化の変遷をみていく場合、まず2つの方法が考えられる。その一つは過去の記録による方法であり、他の一つは聞き取りによる方法である。秋山の場合、過去の

物質文化に関する記録資料として最もすぐれたものは江戸末期の1828年（文政元年）、鈴木牧之によって書かれた『秋山紀行』<sup>17)</sup>があり、今から約150年前の衣食住を知る上で極めて貴重なものである。また秋山の個人が所蔵する地方文書<sup>18)</sup>や日誌<sup>19)</sup>も断片的に当時の生活を推察する上で重要であるが、今回の物質文化に関する調査において、ムラ人の物質文化とのかかわり方を考察する上では、記録資料は参考資料の程度にとどまらざるを得なかった。

聞き取りによる調査では、今回は特に生活史調査に多くの時間を使った。モノと個人とのかかわりを具体的な個人の体験を通じて、ある時期（ある時代、また個人のある年齢）の変化内容を把握することができるからである。

こうした目的での生活史調査を行うにあたっては、調査可能なインフォーマントをまず選ばなければならない。秋山の場合には、明治、大正、昭和（戦前・戦後）のそれぞれの時期に生れた人を選び、他方、かつての秋山の主たる生業になっていた焼畑農業（現在は水田農耕に移行）を主に行っていた人たちと、はじめからそれ以外の職業を主に行っていた人たちとの群に分けて選択した。その折、インフォーマントはこの秋山部落の生れで、ここで主に暮してきた人たちを条件にして、合計24名を選んで調査を進めつつある。

これらのインフォーマントについては生活史を聞く一方、それぞれにモノ（衣と食）を作ってもらいながら、製作工程の記録とその工程上の技術についての聞き取りも平行して行っている。例えばその内容としては、衣服であれば、どんな材料をどこから求めるか、それをどういう裁ち方で仕事着やふだん着を作るのか、技術の伝承はどのようにして得たか、また作る上での「コツ」は何か、個性を出す方法があったかなど製作工程の中で聞き取りを行っている。しかし、この際、相当に事例を数多く集めなければ、インフォーマントのクセという問題もあるので、そのムラにおける一般的なパターンがどうであるかを明らかにすることはできない。このため、各ムラで老人たちに集まってもらい、ムラの傾向を確認することも行っている。製作工程を実演してもらった時、実際に作られた製品は、たとえばワラ製の履物とか仕事着は、すでに5点国立民族学博物館で購入し、あるいは寄贈を受けて現在本館に収蔵することができた。しかし、食物については作ってもらっても、これをいつまでも保存することができないため、できるだけビデオテープによってはじめから終わりまでを記録にとった。

（こうした目的のためには特にビデオテープは物質文化の長時間記録作製上、最も有

17) この本については[鈴木 1962, 1971]を参照。

18) 小赤沢部落の福原家文書。

19) 屋敷部落の山田庄平氏所蔵。

効であり、現地でビデオテープをムラ人の前で再生しながら、更に聞き取りを補充することもできるので、今後の調査においてはビデオテープ記録が不可欠なものだと考える)。

衣食住の一般調査においては、最初に現在の通過儀礼や年中行事を通じて考察してきたが、とくに、生活の場が「ケ」の日常性から「ハレ」の非日常性へ変化していく過程で、モノもっている属性の変化の状態を把握、次に過去の通過儀礼や年中行事を中心に現在まで変化したモノやその属性、また変化しなかったものを時代的に跡づけることを行っている。

なお今回の調査にあたって痛感したことは、人とモノとの意味的關係のなかで、ムラ人がすでに慣習として完全に慣れてしまい、無意識となっている部分については単なる面接では答が得られないという事実であった。例えばムラ人はイロリに対して強い神聖感を抱き、ハナカミをイロリの火で燃すなどしたら非常な不快感を示す。こうした事実はムラ人へ普通にたずねても答が得られないのであって、そうしたことがおこった場においてムラ人の反応を実際に観察することによってはじめて把握し得るのである<sup>20)</sup>。今あげたイロリの場合は、そこに著しい神聖観が加わっているため、ここへ不淨物を投げ入れることは甚だしく「モッタイナイ」こととしてムラ人の心に意識され、こどものときからその感情は強いしつけによって育まれてきた。したがってイロリは単に暖房や調理のための施設だけでなく、また特別な「意味」を持ったモノなのである。こうした点について分析することは単なる面接調査では把握しにくいことは前に述べたが、また偶然に出会った観察だけでも不十分な場合が多い。今回の調査では、短い期間で、モノに潜む属性を見付けだすため、もうひとつ新しい方法を用いてみた。

それは意味的關係を探るための間接的な方法として心理学において「意味空間 (semantic space)」とよばれる分析法である。それは Osgood [1957] などが用いている方法<sup>21)</sup>であるが、この方法を部分的に利用し、ムラ人がモノに対する概念構成のパターンを把握しようと試みた。この方法では、人間のモノに対して抱いている情緒的

20) 1950年代のはじめ、未だ学生であった筆者(大給)が秋山を訪れたとき、イロリ端でその家の主人と話しているうちに、たまたま風邪をひいたため、紙をとり出してハナをかんだことがあった。紙を散らしてはわるかろうと、とっさにイロリの火のなかへ投じて焼こうとしたところ、その家の主人は甚だ不快な、怒った顔で、あわててその紙を箸ではさんですてたのであった。筆者(大給)はイロリの火が神聖であり、ムラ人が如何に強い感情をこの火に対して抱いているかを、ここではじめて知ることが出来たのである。

21) Osgood の方法は、ある特定の対象に対する認知を概念と尺度との相互関係でとらえるもので、因子分析法や「八分円」分析法などによって空間化し、いわゆる心理学的な「意味の地図」を作成して解析していく方法である。

概念や、評価概念などを含め、日常、意識していない属性的な概念を把握するのに役立つと考えた。それとともに、ある人間の特定のモノについての理想概念を聞くことによって、概念構成図を作り、集団としての型を把握することも始めている。これにより、面接では充分描き切れなかった彼等の道具に対するかくれていた態度についての資料を補助的に得ることができる。こうした意味空間の調査は資料を現在整理中であるが、興味ある結果が得られるのではないかと考えられる。

## 2. 秋山の地域的特色と時代的変遷

### 1) 秋山の生業

この秋山が著名になるきっかけを作ったのは江戸末期の人、鈴木牧之であった。彼は1828年に秋山を訪れ、その見聞録を『秋山紀行』としてこの年に記したが、さらに1839年、『北越雪譜』を、版行し、そのなかに『秋山紀行』の抄録を「秋山の古風」として記したのであって、この『北越雪譜』を通じて秋山はひろく知られることとなった。秋山の戸数をはじめとして、当時の住民がいかなる家に住み、どういう食物をたべ、どんな衣服を着て生活していたかが詳細に記録されている。

この記録に記されている江戸時代末期から大正の初期までの間、食については基本的な大きな変化はみられない。変化があったとすれば、住居が江戸時代末期に半数以上残っていた掘っ立て柱の家から基礎を固めた、土台のある建築へと移行し、明治20年頃から和牛の飼育と共に中門造りの形に改築していった諸点である。また、この間の衣服についての変化は「アンギン」と呼ばれているアカソやエラセ（野生カラムシ）の繊維（苧）から作る仕事着が、木綿にとって変わり、明治中期の頃には着

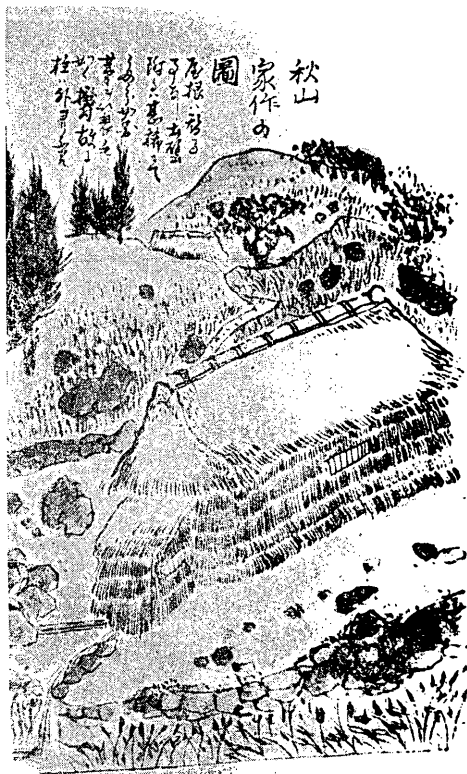


図10 「秋山紀行」より家作の図

た人も、製作者もいなくなってしまった点である。

なお生業は、水田耕作が江戸時代には殆どなく、主として焼畑（カンノ）農耕でアワ、ヒエ、ソバ、大豆を作っていた。この焼畑は昭和26年平均1.5町で、1反当り収穫は極めて少なく、（ソバ、アワ、大豆などは昭和24年平均0.6石/反）生活程度も甚だ貧しかったが、こうした状況は江戸時代以来、大正のなかばすぎまでずっと続いてきた。筆者（大給）が秋山の調査を開始したのは1951年（昭和26年）であるが、当時においてもなお生活は貧しく、米を3食とも食べられるのは各部落とも2〜3戸、あとはアンボとよぶ直径10センチメートルもあるマンジュウを食べていた。これはソバ、ヒエ、アワの粉をこねて、野沢菜漬や味噌とまぜた大根菜を中にいれて丸め、ゆでて作る。またイロリの火棚で乾燥したそれをイロリの灰の中でムシヤキにしてチャナコ（焼きもち）としていた。アンボのほか、昼食にはカテメシといって、粟と米に野菜を入れて焚いた飯、ダイコンメシ（大根に少量の米を入れてたいたもの）、夜にはアワにジャガイモ、ヤマイモを入れたゾースイが一般的な食事の内容であった。

なおこうした貧しい生活を助けるため、明治中期から東京、大阪、静岡などへ女中奉公、子守り、カマボコ屋の手伝いなどに出ている者が多く、それらに対しては大正年代、1カ月に6円乃至は7円の給料を得ていた。但し東京へ出るときの交通費は5円であったというから、収入の乏しさがうかがわれると思う。しかしそれでもなお、この出かせぎは甚だ重要な意味を持っていた。その原因の第一は、世帯内の口数を節減し、食物消費量をおさえることができたからであった。

こうした状況に変化のおこったのは1922年（大正11年）より1924年（大正13年）にかけ、下流に中津川発電所が出来た時であった。発電所が出来たために、ムラ人が「カネトリ」とよぶ人夫仕事で当時白米48銭（1升）に対し、人夫賃は1円80銭（1日）で仕事が増加し、現金収入の道が開けた。これによって生活全体に大きな変化が訪れた。これが秋山における変化の第一期であったと考えられる。なおこの頃、今まで米を食べられなかった人たちの間に増田活動がおこり、ゆるい傾斜地に田んぼを掘って、焼畑から水田への移行がおこった。そしてちょうどこの時期、幸いにも寒冷地に耐え得るような新しい米の品種が入ってきたので、ここで水稻栽培が可能になった。なお先に述べた如く、現金収入の道が出来たために、経済的にみて効率のよくない水田を増田する方向へ、労働力をむけるゆとりが出てきたと言える。かくて焼畑農耕と水田農耕は戦後しばらくの時期まで平行して行われてきたのである。

だが焼畑農耕はムラの共有地を利用するので労働力に比例して収穫も得られるが、反面天候の影響を受け易く、労働力が都市に流れた戦後は、収穫を確保することが困

難になってきた。かくて焼畑農耕への意欲は失われ、1960年（昭和35年）ごろになると殆どの家が焼畑を廃止する迄に到った。屋敷部落では今まで部落共有林であった土地を「山割」りと称して家族単位に移転登記し、その土地を多くの人は山林として植林するようになった。焼畑を行っていたころはムラ人はぼう大な共有林を持ち<sup>22)</sup>、スギや食料資源となっていたトチなどの使い切れないほどの原木があったが、しかし商品としての市場価値は極めて低かった。山林の市場価値が高くなったのは最近のことであり、当時は自分の家を建てかえたりする時も、ふんだんに共有林の木を使うことが許された。しかしトチの実には先にも述べたように非常に重要な食料資源であり、米食が一般に食べられるようになった1960年（昭和35年）頃までは、トチの実の採集にも「ヤマノクチ」（トチの実ひろいの口開け）が部落ごとに定められていた。たとえば小赤沢部落では苗場山祭りの9月5日から一週間後の12日に「山の口」がある。そして一戸平均4～5石という大量の採集を行い一年間の使用量を確保したのである。このようにそれまでの秋山は常に食料が非常の状況にあったため、トチの実を加工して食べることが食生活のなかで極めて大きな比重を占めていたのである。このようにしてトチの木は極めて重視されたが、他のスギ、ブナなどは全く軽視され、市場での需要も少なかった。山林の需要は、秋山の上流にある国有林が1952年（昭和27年）より伐採され、搬出されるようになってから、次第に注目されるようになった。1970年頃（昭和45年頃）、秋山の木材資源から大型の木鉢や、民芸の家具（卓）に現地で大量に加工されるようになると今まで食料資源であった古木のトチは、またたく間に伐りたおされ、現在では大きなトチの木を見付けることすらできなくなってしまった。

一方では1970年代つまり昭和40年代後半になるとこの秋山はそれ迄の隔絶した山村から一挙に観光地秋山へと変貌をとげるに到った。この時期にはすでに大都市の「味気なさ」がますます云々された頃であり、それと共に若者の間における「秘境」への旅行熱、探訪熱はますますたかまり、「カニ族」なることばが誕生したのもこのころであった。民具、民芸ブームが生れたのもこの時期であり、特に国鉄によるディスカバー・ジャパンの秋山郷紹介のポスターによる刺戟ということもあって、地方文化の美しさが大きく見直されるようになったのもこの時期である。こうした背景の影響を受けて秋山は大きく変貌して行ったことになる。殊に「平家の落人の村」というキャッチ・フレーズのもとに、国鉄の観光ルートの中にも組みこまれ、その結果、観光客相手の商売がたちまち登場してきた。民宿、食堂、のみ屋、土産物屋等々が急増し、

22) 1951年（昭和26年）小赤沢部落45戸所有540.4町、屋敷部落18戸所有526.6町、上の原部落13戸所有176.8町、和山部落5戸所有76町。

かくて賃労働とは別なサービスを主体とする現金収入がうるおうようになった。それ迄は隔絶した土地に住む者として抱いていた周囲へのコンプレックスはたちまち霧散し、逆に観光地としてますます前進させようとする運動がさかんとなった。

こうした変化が彼等の社会生活に及ぼした影響ははかり知れない。この調査が最初に始められた1951年（昭和26年）当時の社会生活の特色を一言でいえば閉鎖性の一語につきた。よそびとを入れたがらない点が強かったが、その原因の第一はと云えば、江戸時代末期には伝染病、殊に天然痘に対する恐怖心であった。それが戦後においては、他人に対する懐疑心と自分たちの貧しい生活を他人にみられたくないという心理が強く、調査者などを含め、都会からのお客さんに対しては無理しても白米の食事を出しながら、自分たちは客に背を向けて見られないようにしながらカテメシやアンボを食べるのが普通だった。

このように秋山の生業の変遷は日常の食事の内容にとっても、大きな影響を与えている。今後の本報告においては、秋山のムラ人の意識の中で、これらの変遷過程をその当時においてどのように受けとめていたかを併せて詳述していく予定である。

## 2) 秋山の社会

秋山には江戸時代から続いていた、本分家集団（ヤゴモリ）が、一つの基礎的集団として特色をもっている。なおマキなる用語もある。これは明確な本分家に入らぬ家も含めて、すべての同姓の家を対象としたもっと広い集団概念であるが、社会的に機能しているものではない。むしろこのヤゴモリが中心となって昭和20年代まで、ムラの行政がいとなまれていた。すなわち、ヤゴモリの総本家はオモダチとよばれ、ムラの主要行事の決定はオモダチのあつまった集団（オモダチ衆）によってなされてきた。そして各本分家集団のなかでも、オモダチの果す役割は極めて大きく、ときには分家の結婚問題の場合にも最終的にはオモダチが決定権をもっていたところもあった。当然、本分家間の序列権は極めて強く、通過儀礼のときの役割やザシキに座る座順（住居空間の序列化）などにも反映している。この点はさらに家族内の人間関係においても著しかった。たとえば居間（ナカノマ）のイロリ（ジロ）に座る座順をはじめ、家族員それぞれが持っている食事に用いる箱膳の大きさに至るまで、家族内の序列が反映していたのである。

これに対してヨコの社会関係は2つある。まずその代表的なものは組の関係である。家の普請、屋根がえ、造田作業など共同労働における労働交換は組を単位として行われる。これに加えて重要なのは講である。講は秋山の部落によって種類が多少異なっているが、共通してあるものは4つの種類で、なかでも庚申講が最も重要な位置にあ



る。しかし、ここ10年の間に、部落の組によっては庚申講を除けば講の集りが次第になくなってきている。このことは、ムラ内の労働交換が減少していることとも関係が深い。すなわち、カヤブキ屋根の減少、造田作業の中止などによる需要の減少と共に、それに応ずる人手がいなくなってきたこと、ムラ人の仕事の内容が多様化（民宿、食堂経営など）したため、ムラ人の生活時間の構成が異質化してきた。このこととあいまって、ハレの行事も以前のようにただごちそうを食べる娯楽的な機能や講中のものがオモダチに遠慮せず自由に話し合える無礼講の意味も薄れてきており、最近は何れも宗教的な行事の意義が強まってきた。以上の変化が、ムラの食、住、衣に対して、具体的にどのような関連性があるかは、まだ一部調査中であるので、今後の結果をまつことにしたい。

### 3. 秋山における物質文化とその変遷過程

#### 1) 生活用具

秋山の生活用具の中で、生産関係の道具は、ムラ人自身がその製作技術を持っている場合、原則として自給自足を行ってきた。その中で、とくに鉄製の部品を使わねばならぬときは、秋山にカジ屋がいなかったために、秋山から最も近い川下の町（大割野——現在新潟県津南町）のカジ屋にたのんで打ってもらい、自分で作ったクワやカマの柄にはめこむのが従来からの一般的な習慣であった。このように農耕用の鉄製の部品を、カジ屋で注文製作させていた時代は大正時代の初期までで、その後は、大量生産されたクワの刃を金物屋で求めるようになってきた。その理由は、注文製作に時間がかかることと、価格が高かったことによる。しかし、木鉢やトウフ箱、臼、杵などを作るための各種の工作用具やコビキに用いるノコギリの類は、ムラ人すべてが所有しているわけではなく、かなり製作加工技術を覚えたものが使うため、一品ずつカジ屋と相談しながら今でも注文している。このように特殊な工作用具は、個人の使い方や技術のクセと関連するので、大量生産品で間に合わすことができない性格のものである。そして興味あることは、秋山の中で副業的に用具製作の職人が育っていくことである。たとえば大鉢、盆、雪かきなどの木製用具を作る熟練者、竹でザル、カゴ類を編む人、ワラで履物を編む人、大工や指物の器用な人など、その人の適性と好みによって用具作りのいわば達人が生れてくる。まだ他に直接用具と関係はないが、石組みの名人、屋根葺きの名人といった仕事の上での熟練者もおり、秋山でムラの昔からの生活に必要な仕事は、ほとんどすべて自給できる。

また生活用具の中で、直接体につける背負いハシゴや背中あては、家族が作るもの

で、一部の材料(たとえば背負いハシゴの肩にかける紐がビジョウのついた皮に変わる)
 上の変化を除けば、基本形式は全く変化していないものもある。このことは背負い運
 搬具として、その土地で最も使い易く、完成したものだと見ることもできるし、使用
 者も道具に体がなじみ易い工夫のものだとも言える。そのいずれにせよ、現在進行中
 の調査の中で、道具と人間の働態学的(ergological)な面についても考察していく予
 定である。

もう一つの問題は道具の規格性に関する問題で、たとえばトウフを製造する時に用
 いるトウフ箱がある。これは古いものでも新しいものでも、大きさははっきり定まっ
 ており、各家で作られても、勝手に規格をかえることがない。それはトウフ作りがハ
 レの重要な食品のためという理由からではなく、その製造が協同労働によってなされ
 ることと関係している。すなわち、トウフ作りは2〜3戸の家が大豆を持ちよって半
 日位で作られるのであるが、トウフ箱ひとつ分を作るために大豆2升が必要であり、
 この箱のトウフを切れば秋山で10丁のトウフになるということが慣習となってきた。
 そのため、どこかの家に手伝いに行っても原料とトウフの量の関係が一定している
 トウフ箱が規格として重要なので、トウフを自給するかぎり、箱の形と大きさは容易
 に変えることができない事情になることもわかった。

秋山の道具の中で、変化の大きいものをとりあげてみていくと、バッテリー(水力で
 シシオドシの原理を利用した脱穀具)の消滅、足踏み脱穀機の消滅、臼の不使用、ミ
 ノの不使用、ワラ製履物の不使用、イロリの消滅、箱膳の消滅、イラクサ加工具の消
 滅、養蚕用具の消滅、ワラムシロ編機の消滅などをあげることができる。その反面、
 従来なかった用具が新しく登場してきている。たとえば、ガソリン発動機付脱穀機、
 消毒用噴霧機、ビニールハウス、電気モチつき機、石油ストーブ、プロパンガスのコ
 ンロ、プラスチック用具(容器)、電気洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ、電話、自動車、
 バイク、ゴム長靴、ゴム製レインコート、作業ズボン……など都会生活の用具に近代
 的農機具が加わった状態である。

ここで注目したい事実の第一は従来の用具の機能と同じであるが、省力化のため人
 力を使わずにすむ農機具関係、モチつき機、洗濯機といったものが登場したことであ
 る。秋山でこれらの機器の導入がなされたのは、洗濯機が最も早くて1960年(昭和35
 年)〜1965年(昭和40年)であった。これは昔から使っていた山からの流水利用が中
 止され、簡易水道に変わったことではじめて使用が可能となった。それと同時に昼夜屋
 外の流水を利用して脱穀を行ってきたバッテリーも廃止され、上の原部落にある文化財
 保存用の1基を除けばほとんどどの家もこれを壊して燃やしてしまったのである。そ

の他の省力化した機器の導入は、ここ5年間に急速に高まった。このことは現在の秋山の労働力が1戸1名か2名であり、それも若者が都市に流れ高年齢の労働力であるため、経済的には無理があっても、自給食料の確保のためやむを得ないことであった。現在の秋山では20年前には考えられなかったような経済力が蓄積されたことも事実である。

第2の特色として、住居の改善が変化の大きな原動力になっている事実である。その背景には、(1) 観光客のための民宿の増加 (2) 水道の完成から台所の改善 (3) 居間の暖房のためイロリの廃止（薪ストーブ使用）と天井の設置（大量の薪とりの労働より賃労働の方が高収入）(4) 若夫婦用の都会的な部屋の増改築（過疎化防止のため）(5) 子供の部屋の個室化（進学率が高まるにつれ大型学習機の部屋への固定化）が相互に関連し合っている。

第3の点は冬の交通難と僻地であるという事実から生れた娯楽とコミュニケーションの必要性という側面であるが、こうした娯楽に関して次の諸事実を指摘できるのである。1) テレビ放送網の拡充。2) ムラ人の共有できる娯楽（前項の講など）が家族の生活様式のちがいにより時間的に調整できなくなってきた。3) 巡回映画が来なくなった。4) 娯楽が個人単位となった。こうしたいくつかの因子が原因となってテレビの需要は1960年（昭和35年）から高まっていったのである。

次に第4の点として、ゴム長靴、ゴム製レインコートは1955年（昭和30年）頃より流行し、従来のミノとワラグツより耐久性が強いことで爆発的に普及したが、面白いことに1977年から、またワラグツの保温性と履きごち、軽量性がみなおされ、ミノも夏の暑さに通気性がよく、かつ軽いので再び伝統的な道具が復活する状態にある。

第5点として、自動車やバイクの普及は、ここ3年、幹線道路と部落内の道路が改修され、急傾斜な峡谷ぞいの部落の自宅にまで乗用車が乗り入れられるようになった。農産物の運搬、生活器具の搬入、民宿への観光客受入れのサービスが条件として整ったために可能となったものである。以上が現在の調査の過程でみた生活用具の概略であるが、それぞれの道具が家族によってどのように意識され、評価されているかは今後の調査によって解析していきたい。

## 2) 衣 服

秋山で最も伝統的な衣服はアングンとよばれるもので、アカソ（野生カラムシ）を材料とし、それをつむいで自分のハタでおった山仕事用の着物である。秋山に調査が開始された1951年（昭和26年）頃、このアングンはまだ所蔵されていたが、作る技術はすでになくなっており、むしろ、アイ染めの木綿で作った仕事着が中心となってい

た。昔のアンギンは極めて丈夫で、汗などがしても殆ど痛まず、また通気性が甚だよく、夏冬ともに労働着としては最適である。しかしこれを作るための製作工程に手間がかかり、それを製作するのはもっぱら女性で、ことに主婦か姑であった。しかもこれを製作し得る女性の第一の条件として歯が丈夫でなければならない。アカソの苧を績むためには水にひたした苧をさくため歯を用いねばならないからで、布一匹分織るとすれば2カ月か3カ月分の苧績みの労働がまずはじめにあり、それから機織りをせねばならない。これだけの多量の労働は冬期にするのであるが、それに費し得る時間をとるのは至難のわざであった。また5月から11月初旬までの焼畑労働においては、毎日の生活は午前3時に家を出て夕方6時に帰宅する。しかも帰宅後は1～2時間はヒエの脱穀精粉の仕事などあり、そのあとも針仕事やつくろいものを行うのが女の仕事であった。そして翌朝は3時起床である。こうした苛酷なスケジュールの中ではアンギンを作る時間をみつけることは事実上、冬期を除けば不可能であった。しかし1920年代すなわち大正末期の現金収入の道が開けてからは、むしろ現金を得ては川下の町（大割野）から木綿を買い、それで仕事着を作るほうがはるかに楽なのであった。アンギンがすでに早くから衰退していった事実のうらにはこうした原因が存在している。

次にこの木綿の仕事着の場合、男はカスリ、女はシマときまり、しかも女の場合年令により、シマがあらいか地味かなどの変異があった。また木綿を染めていた家もムラ内にあったが、それは長つづきしなかった。その理由はアンギンの場合と同様で、そのための時間の不足ということが大きく、しかも商品化できなかったからに他ならない。秋山の場合、1968年（昭和43年）頃までは文字通り、食うことに追われていた。生活の苦しいところでは自給自足の傾向がおこることも考えがちであるが、秋山の現実にはむしろ食うことに追われすぎて、衣類などの自給自足まで手がまわらないというのが実情であった。

また秋山の特色として男が冬は猟に出る。マタギの系統の者はクマとりを中心としての狩猟が重要であり、狩猟に適した労働着として「雪ばかま」などが生れた。これは、たちかたに特色がある。女性の場合も野良用としてモモヒキを用いた。また仕事用の上着は、タモトのついたものが古来からのもので、筒ソデになった歴史は比較的新しいのも特色である。

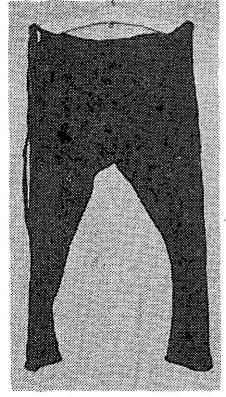
つぎに伝統的には、ハレ着とフダン着との区別がはっきり存在していなかった。比較的よごれていないものをハレ着に使うのが実情である。結婚式の時も出席者全員、ヨメ自身も含めてすべてフダン着のまま出席するというのが戦前までの秋山の状況



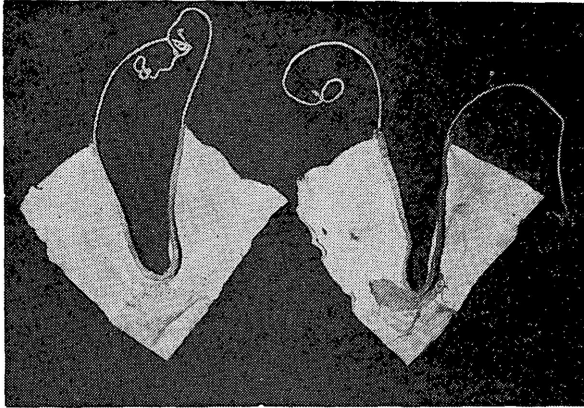
雪バカマ



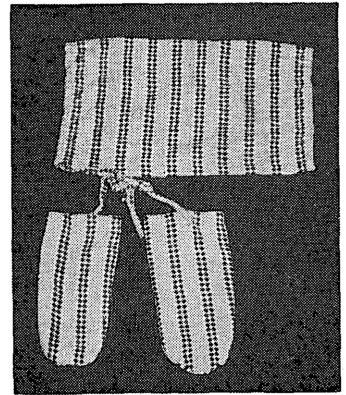
仕事着



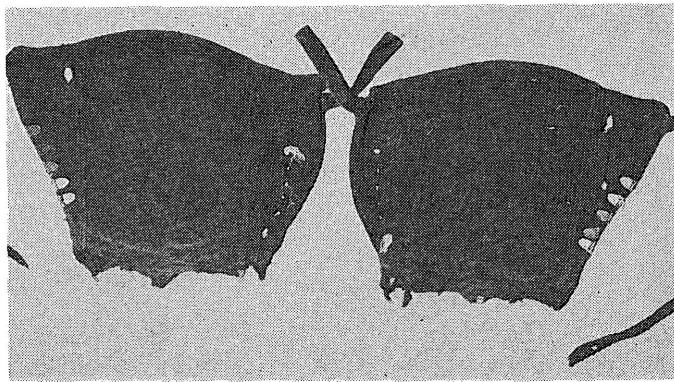
男用モモヒキ



甲カケ



保温用手入レテブクロ



キャハン

図11

であった。ハレ着がはっきりした形で登場するに到ったのは1960年（昭和35年）代後半以降のこととあってよい。それには経済的余裕が出たことも関連するが、外との交流が多くなり、通婚圏も拡大し、1951年（昭和26年）頃95%以上秋山内で行っていたのが、1960年（昭和35年）頃には出稼ぎ先で相手をみつけたり、女性の場合は町住いになる事例が80%以上と逆転してしまったため、若者自身、自分たちの結婚式をムラのなかよりも川下の町や地方都市であげることを好むようになった。そうした変化の結果として新たにハレ着の必要性が生れたのである。

### 3) 食 物

主食についての変化は1953年（昭和28年）頃を境にしておこっている。生業が焼畑から水田あるいは非農へと変るに従い、それまでのソバ、ヒエ、アワなどが減って米におきかえられることになった。

しかし祭その他ハレの日における食事の内容は昔と変化ないのであって、これは昔でも無理して魚を買い、また昔も今も同じようなトウフを作っているからである。この他、豆を煮たものをつけるなども変っていない。むしろ現在興味あるのは、こうした非日常的なハレの日にはかつて最も毛嫌いしたアワのゴハンをそえて出したり、ソバの粉で作ったアンボをいっしょに出す。またもらいものをして近所に分けるのは昔のトチモチやソバのチャノコなどである。すなわち、かつては秋山の人の心に最もいやなイメージをあたえていた貧しい食物に対して、現在ではむしろなつかしい「郷土食」というイメージを抱いていることがわかる。この点によっても、秋山の生活と人びとの心に極めて大きな変化のおこったことがよくうかがわれる。

### 4) 住 居

最も基本的な点として用水の問題がある。上から下へ共通の水を流して、これを飲料、食用、洗濯用に使用していた。したがってその浄化などについてはお互いに規制しながら使ってきた。そして各台所には水盤がおかれ、そこへ常時、水が流れこんでいたのである。しかしながら1958年（昭和33年）に小赤沢では、仮水道が出現し、蛇口の開閉ひとつで水を得られるところから、従来のジメジメした暗い台所から明るい所へと大きく変転をとげるに到ったのである。但し台所の改善ということにもうひとつ関連しているのは燃料の変化という現象である。この点は更にいえば現金収入の得られるようになったという事実とまた関連し合っているのであって、従来は山へ行き1日ないし2日もつぶしてマキをとってきたのであるが、現金収入が入るようになったので、それだけの時間をつぶすよりはその2日間に賃労働をやって現金を獲得し、それによって他から燃料（プロパンガスや灯油）を買う方が有利と考えられるように

なった。このために起った大きな変化は台所における石油コンロの登場であり、今迄、イロリのところで行っていた炊事はすべて台所へ移されるようになった。この結果、台所が大巾に改善されて明るい都会的な台所と変じたのである。

それではイロリのほうはといえば、従来の機能は炊事と冬の暖房、アワ、ヒエの乾燥場であったが、炊事の機能はすでに失われ、冬の暖房のみが要求されるようになった。しかしこの目的のためにはむしろストーブの方がしだいに好まれるようになった。その第一の理由は煙が出ないこと。第二の理由として、イロリは前面だけ暖まるが背中中は寒いこと。こうした欠点を除くにはむしろ天井をはらねばならず、そのためにはストーブが好まれることとなり、イロリは1965年（昭和40年）からしだいに姿を消すに到り、現在秋山では1戸が使用しているにすぎない。

かくの如き変化についてムラ人自身は次のような評価を行っている。長所としてはまず部屋が暖かくなったこと。イロリの煙で眼を痛める人が出なくなったこと。少ない燃料でひと冬過ごすことができること。これに対する短所としては、イロリの火が見えないと話がはずまない、さびしいなどというはなしが老人たちから多く聞かされる。しかし若い人たちの間ではそういう声は全く出ないのであり、言いかえれば、イロリのもつ機能はストーブにとって代られることによって解消してしまったように思われる。なおストーブ自身にも改良型があらわれ、煙突の途中に大きなタンクをつけ、ここで大量の湯が沸かせるようになった。これによってフロのお湯まで供給できるようになると、それ迄は殆どの家になかったフロがどこの家にもつくようになったのである。そして1971年（昭和46年）ごろからあと民宿が急増するとこれが持ちプロを促進する原因となったといえる。（過去において都会へ出ていた人びとは帰郷してからあと別にもラの文化へ影響を与えて変化をおこさせることはなかったのであり、この伝統的文化が極めて高い凝集性を持っていたことがこれによって示される。しかし民宿の出現以後は急速に変化が生活のすべてにもたらされることとなった点には注目する必要がある。これは民宿の場合は特にフロやトイレにおいて都市的な生活様式をとり入れないと保健所からの許可がおりないのであって、ここに大きな原因がある）。

他方、若者の流出、ヨメをみつけることの困難なども居住改善の方向を促す大きな要因となった。若者たちは都会へ出て都会の職場にいるときにヨメをみつける。そのヨメを伴って帰郷し、夫婦がここへ住むということになれば、今迄の伝統的な間取りには不満をもち、曲り家の中門の上に6畳なり8畳の部屋を作り、そこにはステレオや彼等が都会的なイメージのシンボルと考えているカラフルなカーテンにアルミ・

サッシの戸がつけられる。増築の場合にしてもスペースの関係で横へ増築していくことは現実に不可能なので、上記の如き、中門の上への増築といったことがどこでも起るのである。

以上概観してきた如く、ある時期から現在にかけての秋山の衣食住は、ある場合には全面的な変化、ある場合には伝統的パターンを残しながらの変化をとげてきた。そしてひとつひとつの物質文化についてみれば、時代の変遷と共にその物質文化のもつ「意味」が刻々と変化しているのであり、その意味の変化についての考察が、秋山における分析の焦点だといえよう。とくに時代の変遷に伴う個々の物質文化のもつ心理的役割の変遷に特に重点をおく場合、意味なる語を用いたほうが妥当であるように思われる。例えば秋山においてある種の物質文化は現在では実際的な機能は全く果していない。しかし、最近における急速な文化変化を経てきたムラ人にとっては昔の生活への強烈ななつかしみの念をおこさせる役割を果しているのであるが、こうした作用を「機能」ということばで表現するよりはモノに対する認知の概念として「意味」という語で表わすほうが、よりいっそう適切であるように思われる<sup>23)</sup>。

## 文 献

アチック・ミュージアム

1936 『民具蒐集調査票目』アチック・ミュージアム（日本常民文化研究所編 1972『日本常民生活資料叢書』1 三一書房, pp. 931-952〔再録〕）。

BEATTIE, J.

1964 *Other Cultures: Aims and Achievements in Social Anthropology*, Cohen & West.

BOHANNAN, P.

1963 *Social Anthropology*. Holt, Rinehart & Winston.

今和次郎

1971-72 『今和次郎集』ドメス出版。

今和次郎・吉田謙吾

1930 『モデルノロジオ・考現学』春陽堂。

1931 『考現学採集（モデルノロジオ）』建設社。

宮本馨太郎

1963 「民具研究の回顧と展望」『物質文化』2: 1-22。

1973 「民具研究の歩み」『民具入門』慶友社, pp. 197-210。

23) この点についても、私ども4名の間に若干のニュアンスの差がなお存在している。「意味」の場合には「人」からモノを説明する立場における語であるのに対して、「機能」の場合には、逆にモノから「人」を説明する立場における語であって、しかもこの両者の立場は、第1章における議論にそのまま関連し合っているように思われる。すなわち、第1章の(註9)に示した「様式」からの出発を強調する立場においてはそのモノの「機能」なる概念を使うことをむしろ強調し、逆に「人」の問題からの出発を強調する立場においては「意味」なる概念のほうを強調している。この2つのみかたの差異は、更に方法論においても明らかに相違を生みだしているものであり、後者は生活史などの分析にウェイトを置いて、そこからの出発を強調するのに対し、前者はむしろモノそのもの、もっと詳細なる記述分析を以て出発点としている。



祖父江・大給・中村・大塚 物質文化研究の方法をめぐって

向山雅重

- 1943 「わらじ覚書」『続山村小記』山村書院, pp. 193-238。  
1968a 「わらじの風土性」『信濃民俗記』慶友社, pp. 19-26。  
1968b 「わらじの形態」同上, pp. 27-38。

中村俊亀智

- 1972 「鋸の諸形態」『文部省史料館研究紀要』5: 333-399。  
1976 「東北地方のタケカゴ細工の基調——日本列島におけるカゴ細工の諸系列(1)——」  
『国立民族学博物館研究報告』1(4): 847-867。  
1977a 「関東地方のタケカゴ細工の展開——日本列島におけるカゴ細工の諸系列(2)——」  
『国立民族学博物館研究報告』2(1): 172-195。  
1977b 「中部地方タケカゴ細工の諸相——日本列島におけるカゴ細工の諸系列(3)——」  
『国立民族学博物館研究報告』2(2): 351-376。  
1977c 「近畿地方のタケカゴ細工——日本列島におけるカゴ細工の諸系列(4)——」『国立  
民族学博物館研究報告』2(3): 605-631。

岡 正雄・江上波夫・八幡一郎・石田英一郎

- 1958 『日本民族の起源』平凡社。

OSGOOD, C. E., G. J. SUCI and P. TANNENBAUM

- 1957 *The Measurement of Meaning*, University of Illinois Press.

大島襄二編

- 1977 『魚と人と海：漁労文化を考える』日本放送出版協会。

PRICE, J. A.

- 1973 *The Superorganic Fringe: Protoculture, Indioculture and Material Culture* *Ethos* 1  
(2): 201-218.

大矢 透

- 1888 「削掛と御弊」『東京人類学会報告』I: 168-174。

ROBERTS, J. M.

- 1951 *Three Navaho Household (Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and  
Ethnology 40)*, Harvard University.

祖父江孝男

- 1964 「ミクロネシアにおけるココヤシ葉製編籠：その製作技術と分布について」『石田英  
一郎教授還暦記念論文集』角川書店, pp. 181-194。  
1971 「諏訪と伊那」祖父江孝男『県民性：文化人類学的考察』中央公論社, pp. 149-156。  
1976a 「杉浦健一：ミクロネシア研究の先駆者」『社会人類学年報』2: 142-158。  
1976b 「日本の地域的特性」(電通 PR センターにおける講演)。

祖父江孝男・須江(原)ひろ子・村上泰治

- 1957 「エジコの文化人類学的研究：分布及び地域的変異」『人類学雑誌』66: 77-91 (祖父  
江孝男 1976『文化とパーソナリティ』弘文堂に再録)。

総合研究開発機構・株式会社 CDI

- 1976 『現代日本の農村における生活様式の変化の実態調査研究』(NRS-75-6 総合研究開発  
機構助成研究)。

杉浦健一

- 1942a 「ミクロネシアの椰子葉製編籠」『人類学雑誌』58(10): 403-412。  
1942b 「南洋の椰子葉籠」『民芸』4(3): 41-48。

鈴木牧之

- 1962 『秋山紀行』信濃教育会出版部。  
1971 『秋山紀行・夜職草』(東洋文庫 186) 平凡社。

坪井正五郎

- 1887a 「削り掛けの種類及び沿革」『東京人類学会報告』2: 130-140。  
1887b 「風俗漸化を計る簡単法」『東京人類学会報告』2: 172-174。  
1887c 「中等以上の者900人の風俗を調べたる成績」『東京人類学会報告』2: 221-2 4。  
1887d 「削り掛け再考」『東京人類学会報告』2: 224-230。

- 1887e 「削り掛け考材料」『東京人類学会報告』2: 258-264。  
1887f 「東京中三カ所及び相模三崎にて行ひたる風俗測定」『東京人類学会報告』2:281-284。  
1888 「風俗測定成績及び新案」『東京人類学会報告』3: 244-251。  
1889a 「東京西京及び高松に於ける風俗測定成績」『東京人類学会報告』4: 138-144。  
1889b 「東京に於ける髪履欧化の波動」『東京人類学会報告』4: 280-281。

山中 笑

- 1887 「御幣及び削掛の走り」『東京人類学会報告』3: 37-41。

和田 萬吉

- 1887 「削り掛けの事二件」『東京人類学会報告』3: 73-74。

WATANABE, Hitoshi

- 1975 Bow and Arrow Census in a West Lowland Community. *Occasional Papers in Anthropology*, No. 5, Anthropology Museum, University of Queensland, Australia.